

「“本を味わい日本を知る”  
作文コンクール 2019」 (中国語版)

入賞作品

## 目 次

### ★「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2019」(日本語訳) 一等賞作品

澳門大学 教育学院 大学院二年生	夏詠儀 .....	3
上海財經大学 会計学院 二年生	吳昭程 .....	5
武漢大学 信息管理學院 三年生	劉雨賀 .....	8
北京大学 人文学部 二年生	劉立杰 .....	10
華東理工大学 外国語学院 三年生	方晴嵐 .....	12

### ★「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2019」(中国語原文) 一等賞作品

澳門大学 教育学院 大学院二年生	夏詠儀 .....	15
上海財經大学 会計学院 二年生	吳昭程 .....	17
武漢大学 信息管理學院 三年生	劉雨賀 .....	18
北京大学 人文学部 二年生	劉立杰 .....	20
華東理工大学 外国語学院 三年生	方晴嵐 .....	22

### ★「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2019」(中国語原文) 二等賞作品

福建師範大学协和学院 日本語専攻 四年生	黃少婷 .....	24
復旦大学 法学院 修士三年生	王施施 .....	26
暨南大学 海外華人文学 博士生	李宜萱 .....	27
北京大学 核技術及応用専攻 博士生	楊志濤 .....	29
華東師範大学 歴史学 四年生	呂玉琳 .....	31
南方医科大学 臨床医学専攻 二年生	王茂源 .....	33
東北師範大学 漢字言文学 一年生	鮑芝瑾 .....	34
聊城大学 日本語専攻 三年生	王咏雪 .....	36
東北師範大学 財政学 四年生	李岱霖 .....	38
湖北汽車工业学院 國際經濟与貿易 二年生	艾新宇 .....	41

# 「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2019」

(中国語版)

一等賞作品

(日本語訳)

## 虹の深く

澳門大学

教育学院 大学院二年生

夏詠儀

お茶を味わって山いっぱい桜を愛で、虹の深くで世の中の賑やかさを見届けて。

——前書き

初めて『源氏物語』に出会ったとき最も印象深かったのは恐らく無意識にまたはわざと登場する女性の数々です。徐志摩先生の「あの頭を下げたやさしさは、水蓮の花が涼風に堪えずはにかむよう」で形容したいと思います。川端康成がノーベル文学賞受賞講演で、「少年の私が古語をよく分らぬながら読みましたのも、この平安文学の古典が多く、なかでも『源氏物語』が心におのずからしみこんでいると思います」と語っています。

四世代を経て、七十数年にまたがり、栄華と贅沢三昧、腐敗と淫乱を書き尽くした物語。紫式部の言葉遣いで、女性達の顔や声が紙上にありありと現れ、賢くて利発でも天寿を全うできない者、寝所で一人きりの生ける屍、剃髪して遁世する物、墓へ踏み込み幕を下ろす者。怒っても争わない悲しみは、何年も経ってから読み返しても変わりません。環境と心境が変わるにつれ、「吉」と「凶」でこの女性達の運命をくくるとはなくなりました。光と影が交錯し、物欲が強く、彼女たちが幸せでなかったと言えるでしょうか。喜びがなかったと言えるでしょうか。こうなっては評価する必要はないので、是非を語らず一人一人の「ハムレット」の味わいを残しておきましょう。

気楽に『源氏物語』を開いたとき、明らかに作中で描かれた時代と作者のいた時代いずれもが中華文化と複雑に入り組んだつながりを持っていることに気づくでしょう。白居易の詩歌、唐錦の風靡、舞楽の繁栄など、中日の文化の友好的な交流を実証しないものはありません。外来文化の吸収と改造を通じ、日本は次第に「唐風文化」から「国風文化」への移行を実現しました。

遣唐使、鑑真の来日など真実の歴史上のできごと、両国間の友好的往来の痕跡を、古今を通じて実証しています。また作中では多くの人物が生活のままならないとき、「人生無常」、「四大みな空なり」といった仏教観をよくつぶやいています。彼らは時々「仏門に帰依する」ことが正しい道で必然であり、俗世を離れて、苦しい境遇を抜け出した最後の落ち着く先だと考えます。ほかにも、作中は人生の八苦、愛する者と別れる苦しみ、求めても得られないといった仏教思想があふれており、鬼神の話まで出てきます。中日両国の学び合う文化の多様さ、深さにどうしても感嘆してしまいます。

機会があったら春の花咲く頃に日本へ飛んで、街角で桜を愛で、茶室を訪ねてひとときを過ごし、リラックスしてみたいと思っています。往来が盛んでにぎやかな、贅沢で享樂的な大都市よりも、北海道の温泉や京都の小道が続く閑静な地のほうに心が動きます。大唐に回帰する夢さながらの異国の都市に行き、そこに身を置き、大唐の深層意識と大和の文化を心身に入り交じらせたいのです。

京都に対する執念は、その長い間がたってもますます新しく、深い文化的基盤によるものです。あのような古色ただよふ風情は決して一朝一夕のものではなく、瓦の一枚一枚に物語があって、実に良いのです。唐代の都、長安城が下敷きだとは言え、六朝の古都である南京を思い出してしまいます。千年の沈積はその優美さ、悲壮な美と雄壮な美を大和民族の血に深く揉み込んでいます。南禅寺の夜の雨音を聞いて、似て非なる四阿と楼閣をしげしげと見て、美しい和服を身につけ、雨の中のそぞろ歩きを体験して、食欲に京都を味わってみてはどうでしょう。「行きて水の窮まる處に到り坐して雲の起る時を見る」暮らしも価値があると思います。

しかし私の理解と違うのは、寿岳章子が京都の「よろこび」を残さず読者に見せてくれることです。『京に暮らすよろこび』はこの街の人の温もりを解釈して、普通の人の小さな幸福をそのまま再現することで、最も自然に鮮やかに人生の百態をまとめています。「京都交響曲」が響くとき、ある人は強い日差しの下で無駄に大きな一輪車を押して歩き、ある人は高い声でものを売り、ある人は生地をグラデーションに染め、豆粒ほどの汗も素朴な京都人がこの都市に残す一筆一画を止められません。生活必需品、文化や娯楽が生活を心から愛する人々が集まると、それは拍子木、カスタネット、和音のない輪舞曲。気運に乗じて生まれた京都は歳月の長い流れの中で生きており、有意義な人や物事を後世に伝えています。

沢田重隆の挿絵が『京に暮らすよろこび』に貢献しており、密画の筆の運びで俗世間の質朴で明るいきさまな色を捉え、一枚一枚の絵が文字と持ちつ持たれつで引き立て合っています。思わず張挾端先生の『清明上河図』を連想しました。一枚の絵巻に俗世の暮らし向きが映し出されており、こうした温もりは心に直接届きます。あたかも繁栄し盛える開封の

都で生活するようで、なんと幸せなことか。

書物を置くと、まるで精神の洗礼のようです。私達は自分の力でまだ戦火やブルドーザーに埋められていない古跡を守って、記憶の中の嗅覚と味覚を追いかけます。「人情味」の三文字が京都の生活でことこまかく体現されていることは、実にうらやましいものです。これほど充実感がある生活には、どうしてもあこがれてしまいます。

歳月は流れ、虹は止まりません。日本に行く時だと思っています。

注：

- 1、『源氏物語』紫式部
- 2、『京に暮らすよろこび』寿岳章子（著）、沢田重隆（絵）

## 軒の下で見張る人

上海财经大学  
会計学院二年生  
呉昭程

「もののあはれ、風雅、幽玄、位相」

上品な窓枠から見えるのは、その窓越しに洞察する、孤独で剛毅な、悲しみと未練の中で見張りをする人の姿です。

黒船が来航し太平の夢から覚めた日本は、1つの窓から2種類の文明が織りなす生活を覗いているようでした。ぶつかり合い交流しあう生活は、現実と夢の中で、またひとつの文明の絵巻を展開します。

1枚の窓の中にこれほど深い情緒があろうとは。

日本の窓は、荒れ野の中から歩いてきた、静かで落ち着いた窓です。

昔の日本式の窓は、静かな田園の志向に伴って生まれました。竹林の照り輝くもとの、庭の間をめぐる回廊の中で、カエルの声、雨音、さらさらと流れる水の音が聞こえます。最も静謐な場所で、1杯のお茶の立ちこめる湯気の中に、清く澄んだ香りが立ち上りだします。お茶と茶道は、そこで嗜んでいる瞬間の名声を残すもの。いわゆる「一期一会」はいいもので、紛争、無関心、対立をよそにおいてお茶を前に向かい合い、繰り返すことのない出会い

に心を静めます。そのとき、禪の世界、天と一体になる境地、平和に収まる楽しみが、この軒の下で、窓の格子の前で、落ち着きながらも期待に満ちています。

遣唐使が唐朝を訪れ、大唐の盛んな時代の文化に直面して取り込んだものは決してすべてではありません。彼らは禪の落ち着きを選び、平板な水墨の志として、民族の精神にしまい込みました。大化改新以後の文明は、窓際に歴史のシルエットを残し、田園の牧歌的水平志向に続いています。彼らは偉大な大空を崇拜することなく、広い土地と森の中、八百万の神が存在する場所にいました。窓は自然と通じ合っていて、境界線も障害物也没有。水墨のようにあっさりとした生活の中、窓の中の清らかな心と静かさは窓の外のカエルの声や風雨の中に溶け込むのです。まるで1枚の窓のように、あいまいな日の光と月の影が付き従い、窓がないかのように、文明と自然に決して隔たりがないのです。

日本では引き戸が用いられ、防衛を重視して、次々と重なる鉄柵で嚴重に警備するヨーロッパの砦とは異なり、むしろ広くて厚い屏風のようなものです。のどかな日光、部屋を通るそよ風はいつもかすかな名残だけを残し、日本式のあいまいで柔かな審美の境地を映しだします。鬼神の平等については、多神教の日本の伝統の中で明らかに示され、窓の思想史の中で体现されています。「鬼の目にも涙」は善と悪が絶対的ではないことを信じているということであり、そのため窓の外の世界を受け入れています。窓が悪霊の入る場所とされ、極度に憎まれる西洋文化とは違うのです。

視点を変えて西洋の窓を注視してみると、宗教の文脈のもと、自ら進んで神の崇高さを離れ、冥土と鬼神の往来する場となっています。

多民族の集まるヨーロッパ大陸の中では、戦乱により自ら防御する需要がもたらされました。防御も窓設計の重点になっているのです。洋式の建物は崇高さを求めがちで、一方では天井に向かう上昇志向、他方では神に対する宗教的な気持ちに表れます。窓は高いところに位置して、高い所から見おろす場ともなっています。和式の引き戸と異なり、西洋のドアは多くが外開きで、敵を迎えるのに都合よくできています。守りやすく攻めにくい都市の建築設計は、総じて文明の侵略性と関係があります。近代以降、資本主義の発展によるプライベート空間に対する要求が、部屋の設計で体现されています。西洋の窓は狭いプライバシーの窓口となり、窓の内から外を見下ろすことはできても、窓の外からの視線を遮断します。一方の小さい窓から、このように外を見ても、窓から外の世界とは隔たりがあり、人と人の互いに通じ合っていない悲喜を静観するようなものです。

黒船来航で夢から覚まされ、田園の障子が粉砕されたかのように、近代的を象徴するガラス窓が、維新の中で盛んになりました。

ガラスの製造技巧を学び取った日本人は、「和魂洋才」で鑄直しました。透明なガラス材

を窓に応用し、窓の外の世界に対する透徹した洞察をもたらしたのです。近代化の発展、建築構造の更新により、日本社会の垂直志向が啓発されました。摩天楼のような空まで延びる様式が、西洋文化の精鋭としてそれまでの田園や郊外、一般庶民の生活にも飛び込んだのです。透明な窓、流線型の窓が、電車と鉄道、スピード、効率、近代化した生活に伴って、20世紀の日本を昂然と闊歩し、縦横無尽に突き進みました。

現代化はいつも落ち着く余裕がなく、文化財の廃墟の中で、粉々になって困惑した国民精神が隠れているのです。摩天楼と透明なガラスが社会生活の姿を変え、日本のもともとの文明はどこに置くべきなのでしょう。

日本は明治維新を号砲としてある解答を残しました。西洋化と現代化は真っ青な背景色のように扱い、もともとの文明がより純粋なシルエットを描き出したのです。

摩天楼の崇高さを仰ぎ見ても、田園の景色の安らぎを懐かしむことに差し障りはありません。西洋の文字の国際習俗が流行っても、茶道の芸術の落ち着いた静かさは体得できます。戦争のロボットのような侵略でも、ついには異なる文明に対して敬意を抱きました。科学技術の疾走はいつでも心の冷たさを伴っていますが、禅の知恵があり心の癒やしを体得して……千三百年前に創造されたかな文字のように、「国粹文化を栄えさせ、新たな知恵を溶かし込んだ」後また原生となった文化のように、新たな彩りを放っているのです。

文明には文明ごとの彩りがあるものです。しかし彩りが見られず、潮流に遅れると、文明の遺失と苦痛を伴います。無数の血が流れる大地をじっと眺めると、戦争も、紛争も、誤解と侵略もそうです。

世界の各民族の中で、文明の痛手を治すどんな良薬を探すべきでしょうか。

世の中に一期一会の茶道があって、世界の文明間の誤解と紛争をほどこますように。

世の中に水墨のように淡い文学があって、もののあはれや幽玄のひとときを伝えますように。

軒下の窓が、平和な世界になって、純粋な瞳になりますように。

#### 読んだ本のタイトルと参考文献

「窓」の思想史：日本とヨーロッパの建築表象論 浜本 隆志著

## 美を日本作家の手にそっと

武漢大学  
信息管理学院三年生  
劉雨賀

ここ数年、日本文学が大型書店の文学の棚を埋めるようになってきました。最初1面だったのが何本にもなったのはこの3~4年のことです。内容の幅もごく広く、詩歌と散文から推理小説まであり、絵本や漫画もかなりあります。読者層は書店で読書し、本を買うほぼすべての層を網羅しており、老若男女を問わず心が満ち足りた様子です。

日本の文学にはどうしてこれほど魅力があるのでしょうか。さんざん悩んで頼りない結論にたどり着きました。日本の作家の多様性が理由なのでは。私がよく読んできた作家だけでも、川端康成、三島由紀夫、太宰治、松本清張、東野圭吾、辻村深月、伊坂幸太郎……どの名前も心に浮かべると、それぞれに独立独歩したイメージが脳内に溜まってきます。川端康成と三島由紀夫は興味津々で文学の理念を探求し、太宰治はその傍でのぞき見ていますが、三島由紀夫の激しく刺さる視線と嫌悪する口元に怯え近づけずにいます。松本清張と東野圭吾は慌てることもとろとろすることもなくテーブルを探し、2人それぞれが片側に着席してゆっくりと社会派と本格派の相違と融合する道について雑談を始めます。辻村深月と伊坂幸太郎は特にこだわりなく、手近な席に座って、伏線、多い視点からのエピソード、推理小説での反転の応用などなどやりとりを……ときどき伝わる笑い声で空間全体が楽しみにあふれているイメージです。

思わず面白い幻想を続けてしまいました。ではもし同じテーマを彼らに出したら、彼らはどんな作品にしてくれるのでしょうか。テーマには文学界の昔からの命題「美」が一番ですね。

川端康成ならどう書くでしょうか。島村が目にした「娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時」、それとも初春の「若葉の匂いの強い裏山」と「首に杉林の小暗い青が映るやう」でしょうか。

三島由紀夫ならば、言うに及ばず金閣です。雪中の金閣が「細身の柱を林立させて、すがすがしい素肌で立っていた」か、台風の前「月は鏡湖池の藻のあいだにかがやき、虫の音や蛙の音があたりを占めている」か、それとも放火前の「柿茸の屋根の頂き高く、金銅の鳳凰が無明の長夜に接している」か、きっと彼もたいへん困惑することでしょう。

太宰治が美を語るというともまず思い浮かぶのが中国ではおなじみの「新しく手に入れた夏向きの浴衣」でしょう〔日本語原文に該当の表記はありません〕。結局、美のために半年もの苦痛を我慢しています。もしくは「この淡い牡丹色の毛糸と、灰色の雨空と、一つに溶け合って、なんとも言えないくらい柔かくてマイルドな色調」のセーターでしょうか。「本当の貴族」の母の手によるもので、そのグラデーションは天地の自然美を明らかに示してい



ます。

残る推理作家はまたどんなご高見を發表するでしょうか。松本清張は照子と耕作が森鴉外の足跡を追って入った山林を持ち出すかもしれません。「道の両側は落葉がうず高く積って、葉を失った裸の梢の重なりから、冬の日射しが洩れ落ちていた。足の不自由な耕作は、てる子に手をとられていた。柔らかい、やさしい指だし、甘い匂いも若い女のものだった。」と書いています。

東野圭吾は彼の作品中で少し呼応するくだりがあるのを思い出し、微笑して賛成の顔を見せるはずです。数学教師の石神が自殺しようとしたとき隣に引っ越してきた親子がチャイムを鳴らすので中断され、ドアを開いた瞬間、美に貫かれたのでした。「何という奇麗な目をした母娘だろうと思った。それまで彼は、何かの美しさに見とれたり、感動したことがなかった。芸術の意味もわからなかった。だがこの瞬間、すべてを理解した。数学の問題が解かれる美しさと本質的には同じだと気づいた」。

少し若い世代の辻村深月と伊坂幸太郎は推論を口々に言い続けます。「大安の日に起きること全部でしょう？」辻村が先に声を上げます。「むしろ美は人知れぬ小島で生まれるはずだと思いますけどね」伊坂は弱みを見せたくないようです。「日の入りの頃？」「そう、鳥がいて案山子があつて。」「それなら明るく笑う人たちもいるはず！」「ああ、それじゃそういうことで。」

もちろん以上すべて私が読書から得たものによる想像です。現実の中で一度も会ってない作家が文字の力だけで読者の脳裏の中で生き生きとしていられるのは、文字の魅力だと言わざるを得ません。これほど鮮明な作者のイメージを描けるのは、日本の文学、日本の作家の特徴のためです。

彼らは文中に自分のすべてが現れることを恐れませんが、死生観、審美観、人生観、価値観……中でもよく話題になるのは死生観と審美観です。第二次世界戦争の後、米国の文化人類学者が『菊と刀』という日本の国民性を分析する専門書を出版しました。「菊」は彼らの落ち着いたもの静かさ、芸術と美を愛する姿を指しますが、同時にその性格には「刀」もかなりあります。好戦的でしかも時にひどく変態なのです。もちろん多少は一方的な考えですが、同時に啓発性をかなり備えています。

もし自分が違う物事を使ってその国民性を述べるなら、「桜と刀」を選ぶでしょう。

桜は最も日本を代表する花で、毎春の花期いっぱい続く花見は日本人がほぼ必ず参加する集団活動です。家族、友達、同僚と桜を囲んで座り、満開の桜は風の中で四方に散り、一部は落下して一部は流れて行き、もののあはれの美を詳しく徹底的に演繹します。彼らは花火や散る桜のような「盛者必衰」を好みます。また謹んでわびさびの原則に従う茶器と庭の

ような「はかなさ」と「不揃い」も好みます。しかし矛盾性はそのとき現れていて、彼らは仏ではなく、本当に縁や定めに従い受け入れることができずに、「刀」の一面が顔を出します。きわめて鋭い、自分を犠牲にする方法でたいへんな、はかない美を守ろうとするのです。日本作家にもっと悲しい、もっと景色に関わる風格は求めようがありません。彼らは美を尊重しつつ率直に言うことをよしとせず、ただ周囲を巡って、最も天然で最もなめらかな自然の景色でくるみ、婉曲な言葉の修飾で転々と表現し、ほんの少しの余分な、好感の呼気で美しい風格と趣を吹き散らすことをひどく恐れます。困難も、悲しみもそうです。

だから、美は是非そっとぜひ彼らの手に乗せてください。

## 「いま＝ここ」

北京大学  
人文学部二年生  
劉立杰

幼少から中国の近体詩を読んできたので、俳句にふれたばかりの頃、私は軽蔑していました。たった十七音で構成される文学作品で、起承転結もなく、類義語をたたみかける表現もなく、対句さえありません。文学の様式として、芸術の価値を失っているのではと思っていました。

しかし俳句は読めば読むほど夢中になってしまいます。松尾芭蕉は「物を見て取所を心に留めて不消、書写して静かに句すべし」と言っています。俳句はある種の瞬間の芸術であり、すべての時間が句の中で静止し、読者に限りない感動を残します。俳句には凝った構想が要らず、街を歩いているとき、春の木漏れ日を目にしたとき、秋風が梢をかすめる音を聞いたとき、心に感じたもので一首の俳句が生まれます。

加藤周一は、俳句は「いま＝ここ」に注目した作品であり、「日本語叙情詩形式の歴史の発展の最後の帰結」でもあると述べています。実際はその意味のとおり、俳句は日本語叙情詩の帰結であるのみならず、日本文化の縮図でもあります。

現代日本の「百科全書的」学者と称えられる加藤周一は、88歳の時に著した『日本文化における時間と空間』のあとがきで「この本は日本の思想史について私の考えてきたことの要約である」と書いています。同書で彼は、日本文化のさまざまな面を結びつけ、東西の他国の言語や歴史と対比して、日本文化の「いま＝ここ」の特性を詳しく述べています。彼

は日本語のうち動詞を後に置く独特な構造について、日本の伝統的な村と鎖国、茶室、神社、天守閣、そして「江戸っ子は宵越しの銭を持たない」と福沢諭吉の「大勢主義」についても記しています。軽い筆致で幅広い内容を扱い、私が学んできた知識を串刺しにしてさらに多くの新鮮な内容を補充してくれた同書には、深く啓発を受けました。

日本文化の初めは、律令時代まで溯れるようです。日本が当時の唐朝から学んだ基本的な国家制度が、この時期に安定して発展しました。中国の文字と近体詩も同じ時期に日本に入ったものの、二者の文化は背景色が明らかに異なります。日本文学の古典『万葉集』や『源氏物語』には、のちに「もののあはれ」と呼ばれる要素が含まれています。大西克禮は『幽玄とあはれ』の中で、「もののあはれ」とは「ものを知る心」で、外在する事物の現在の美しさと、いつでも零落してしまうことを知ることだと述べています。そこで、どうしようもなく極致の耽美を求め境地が開かれたのです。この時期の散文の特徴は最も際立っていて、『枕草子』に記されているのは宮廷日常生活のあれこれですが、往々にして一瞬で感動を呼び、今なお広く伝わっています。

貴族の時代は数百年後、武家によって終結させられますが、日本文化の「いま＝ここ」の特徴には変化が発生していません。北条一族は節約を尊び、武家の屋敷を建築する時「増築」の原則を打ち立てました。事前に全体を計画することなく、用途によって随時増築していくのです。このため武家屋敷は一般に対称的な間取りとなっていないのは、目の前の観念を重視したことによるのです。武士の間の「下克上」もよく政局の動揺を引き起こして、『徒然草』のように「人生の無常」を嘆く人も多くいました。こうした観念は陰でまた日本の文化の特徴を強化しています。

武家と禅が合体し、最終的に「いま＝ここ」の文化の特徴を極致に推し進めました。鈴木大拙は『禅と日本文化』の中で、「悟りは禅であり、概念に依存にせず直接到達できる真理」で、「日本人心理の強みは直感的に最も深い真理をつかみ、表象を利用してそのはっきりした実際を表すところにある」と説明しています。「いま＝ここ」の文化の基礎を持つ日本人は禅に優れ、禅を基礎として日本人は茶道、花道、武士道を発明しました。これらの文化の支流が触れているのはすべて禅の「悟り」の体験、つまり「無心之心」に達し、一瞬で無意識に入ることを求めています。禅が日本文化の哲学化を完成して、人に時間と空間を超越させたと同時に、その文化の基礎「いま＝ここ」もさらに深く民族の性格に入ったのです。

日本文化の「いま＝ここ」の特徴がもたらした業績は誰の目にも明白で、日本人は自らの文化をダイヤモンドに作り上げたのです。それぞれの小さい断面がすべてあでやかに輝いて感動させ、一瞬一瞬が比類なくまばゆいのですが、この特徴はいいことばかりではありません。

丸山真男は『日本の思想』の中で、日本の思想史研究は多くの困難に直面しており、困難な原因の一つは一貫したイデオロギーがないことだと述べています。確かに、「いま＝ここ」の文化の特徴のため、伝統的な日本人は決して哲学の思考を行うことに優れておらず、世界的に有名な思想家もあまり現れません。また、「いま＝ここ」に注目するため、日本人は融通をきかすことに優れ、いつでも転向に備えており、特定の価値観に固執しません。このような行為も日本への道義上の批判を招いています。

世界の文化は色とりどりなので、もっと多く理解し、もっと多く交流しなければなりません。

読んだ本：

『日本文化における時間と空間』、【日】加藤周一（著）、【中】彭曦（訳）、南京大学出版社

参考文献：

『幽玄とあはれ』、【日】大西克禮（著）、【中】王向遠（訳）、上海訳文出版社

『禅と日本文化』、【日】鈴木大拙（著）、【中】陶剛（訳）、生活・読書・新知三聯書店

## 孤島

華東理工大学  
外国語学院三年生  
方晴嵐

交際のことを聞くと九割が悲しい記憶、世相のことを聞くと暑さと涼しさ。

旧友のことを聞くと九割が忘れており、生活のことを聞くと本当に望みがない。

都市のことのことを聞くと九割が悲しい話で、人生のことを聞くと本当に痛々しい。

『都会の中の孤島』を読むと、あでやかな美しさに驚嘆させられます。全文がうっすらと灰色に覆われ、真っ向から来るのは戦後の世の変転と重々しさ。人々は俗世の塵やほこりの中で迷い、さすらい、良心をごまかして、墮落し、清算しています。

平凡な生活の中に思わぬ結果が含まれ、人生の終点である死が急に平凡な人生の出口になって、正しい選択は予想する結果が得られないのです。『オモチャ箱』の庄吉が、かつての成績を胸に働きもせず、身上を潰してもなおお責任感も恥ずかしげもなく酒色に耽る姿にしても、『水鳥亭』のたいそうな大地主でありながら頭の回転が鈍いため乞食に

あこがれ最後には鶏小屋で首をつってしまう梅村亮作にしても、『白痴』の愛されていると誤解した白痴の女と肉体を渴望する男にしても、『都会の中の孤島』のミヤ公の身代わりになったグズ弁にしても。誰にでも人それぞれの悲哀があり、凶悪で俗っぽい作家ももちろん夢破れて終わり、何もしない村長は結局その気にかかる相手を理解できませんでした。戦争の中の人には平凡である資格さえないのに、彼の愛情を見破れる人などいるはずありません。

この一切切切がまるで書名『都会の中の孤島』を裏付けているかのようです。彼らはすべて生きて無為に自分の生活を過ごしており、希望も未来も見えない漆黒の殻の中で自分のこだわりで執着し、自分を泡のような繭に縛りつけ、天国と深淵が共にあります。

全体として無頼派を代表する太宰治先生の「生まれて、すみません」を想起するような、自嘲した自虐的な態度や、病的な状態とうとうしい事物が奈落の底まで墮落しても少しも意識しない孤島感には驚かされます。しかし個人的にはこのような隠喩はむしろ作者の内心の批判と転覆を体現しているように感じます。

文学は時代から生まれて、作品は生活から生まれるものです。この作品は、戦後の一部の人の一部の生活の縮図のようです。封建的な古い制度、茫漠とした新しい時期、新旧の価値観の衝突。もしかすると墮落の本質は希望、批判は再生のため、否定は期待のためなのかもしれません。漆黒の世界の中で光明を期待すること、そのものが決して簡単なことではありません。墮落は決して墮落ではなく、人は正しい墮落する道の上で、自分を見つけ、取り戻す必要があるのかもしれません。これは本質的に悲観的な態度ではなく、無頼派も頹廢や悲観を代弁しているわけではありません。深海に身を置くような重苦しい気持ちにさせる文は真実を探る表象に過ぎず、それによって人の本性を回復させ、関わりを清算して、真相を求めるものです。死地に置かれてはじめて活路を見出し、墮落に身を置くことで目覚めるのです。

この本を学び味わう中で、次第に大和民族のことが分かってきました。日本人は腹の中が曖昧で、理性と感性、寂しさとにぎやかさのバランスが良く、抑制的、冷静で、以心伝心の心を探り、礼儀よく人に接して、入念で、それでいて離れられない距離感があります。彼らは敬語や礼儀などの形で内心を押さえつけ、感情は細かいところで表現します。作者は底辺の人々の生活を通じて、そうした自嘲と憂鬱をあからさまにしているのです。小人物の感情の起伏、抑えられた中でのどうしようもなさ、すべて自然でありながら深い表現です。

この本は歴史を振り返り考えるかつての意義だけでなく、この本を通じて日本人の生活の状態を感じる意義もあります。ちょうど作中にあるとおり、「都会の真ん中にだって、孤島の中のように生活している人はタクサンいるものだ。彼や彼女らは、電車やバスなどに乗って勤めにでたり買物にでたりすることはあるが、それはヨソ行きの生活で、その個人生活は全く孤島の中のように暮している人は少くはない」のです。この話

はたとえ今の日本を持ち出したとしても熟考に値します。

日本経済新聞の調査によると、日本の男性は世界の最も孤独なグループです。日本の男性だけでなく、日本の子供も世界一孤独です。日本人の孤独感は生まれつきのように、島国の環境、考え方などの影響を受けて、日本人は内心の孤独を常態と見なしているながら、集団の中での孤独感を非常に恐れます。自分が主流から追いやられることを意味するからです。彼らは内心で孤独を味わいながら思案をめぐらして集団の中に溶け込もうとします。たとえ仮にでも、集団に溶け込んで、誰にでも礼儀正しくほほえみ、決して本心を明かしません。近藤大介は著書の中で「しかし今の東京の町には静かき、清潔さと成熟しかない」と述べています。日本人は自分を偽装することに慣れ、他人の邪魔をせず、悲しもうが喜ぼうがそっとしています。目の前で大風が起り黒雲が湧いても、平静な表情をしています。

こうした冷ややかな消極感のある孤独は時代の発展につれて次第に変化し、今の中国で言う「喪文化」になっています。「喪文化」は現在の青年の精神の特質と集団の焦りを反映しており、新時代の青年の社会意識と社会心理がいくらか表出したものです。若い世代の大多数が気力をくじかれて感じる主な原因は単身、住宅価格、仕事などです。加齢を前に、生活の苦さによる焦りと無力感のため、新世代の若者はこのような表現方式で生活上の空虚さや不満を発散することを選んでいきます。この背後にあるのは社会のやさしさに対する若い世代の抵抗です。「喪文化」は悲観的、退廃的に見えますが、退廃の中でも圧力の次々と重なる生活と対抗する楽観的な心理状態が見られ、実はやはり生活に対するあこがれで満ちています。

ロマン・ロランは「世界でただ一つの真の英雄主義は、生活の真相を見分けた上で心から愛することだ」と語っています。気落ちしても絶望することはない、孤独でもそのために生活を放棄することはありません。たとえ孤島にいても、誠実な墮落は恐くありません。

噴出しそうな孤独に浸り、生活の細々としたことに向き合っこそ、本当の期待が浮かび始めるのです。

悲観的で退廃的な空虚が真っ向から来て、苦境の焦りと無力さに向き合っこそ、本当の反抗が幕を開けます。

天地のために決心して、生命のために命を捧げ、進むため断絶した学問を継ぎ、万世のために太平を開くのです。

時代のために決心して、生活のために命を捧げ、未来のために期待して、光明のために抵抗するのです。

読んだ本：坂口安吾『都会の中の孤島』

# 「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2019」

(中国語版)

一等賞作品

(中国語原文)

## 霓虹深處

澳門大學

教育學院 大學院二年生

夏詠儀

品一杯茶，賞漫山櫻花，於霓虹深處，看盡世間繁華。

一題記

初遇《源氏物語》，印象最深的恐怕是那一位位或無意、或刻意登場的女子，只想用徐志摩先生的“最是那一低頭的溫柔，像一朵水蓮花不勝涼風的嬌羞”來形容。川端康成曾在諾貝爾獲獎感言中說道：少年時期的我，雖不大懂古文，但《源氏物語》卻是深深地滲透到我的內心底裏。

歷經四代，橫跨七十多載，寫盡榮華和奢靡，腐朽和淫亂。在紫式部的筆下，女子們的音容笑貌躍然紙上，聰明伶俐，卻不得善終，或獨守空閨，雖生猶死，或削髮為尼，遁入空門，或踏進墳墓，就此落幕。怒其不爭或說其悲哀，在時隔多年後的閱讀中，也再無波瀾。隨著環境和心境的不同，再也不是用一句“好”與“不好”來概括這些女子的命運。光影交錯，物欲橫流，誰敢說她們不會擁有幸福？不會擁有快樂？既然如此，無需評價，不談是非，就留給每一位“哈姆萊特”來品味吧。

無需細心，當你翻開《源氏物語》的時候，明顯地會發現其中描繪的時代和作者所處的時代都與中華文化有著千絲萬縷的聯繫。白居易的詩歌、唐錦的風靡、舞樂的繁榮等等，無一不印證著中日文化的友好交流。通過將外來文化的吸收和改造，日本逐漸實現了從“漢風文化”向“國風文化”的過渡。

日本遣唐使和鑿真東渡等真實歷史事件也印證著古往今來，中國和日本兩國之間友好往來的痕跡。書中許多人物在生活不盡如人意之時，常常會念叨著“人生無常”“四大皆空”等佛學觀，他們時而會認為“皈依佛門”是大道必然，是脫離塵世、擺脫苦海的最終歸宿。除此之外，書中還充斥著人生八苦、愛別離、求不得等佛教思想，甚至連鬼神之說也在書中有所體現。不得不感歎，中日兩國互相學習的文化之雜、之深。

如若不是沒有機會，大概會趁著春暖花開之時，飛一趟日本，去街頭賞一賞櫻花，尋一處茶室，偷一些時光，給自己放鬆一刻。比起熙熙攘攘、燈紅酒綠的大都市，大約北海道的溫泉和京都的曲徑通幽處更令我心動。想去那樣一座與夢回大唐相差無幾的異國城市，身臨其境，讓大唐情結和大和文化交織於身、於心。

對京都的執念，是源於它的曆久彌新，深刻的文化底蘊。那種古色古香，並非一朝一夕，一磚一瓦都有它的故事，真好。它雖然以中國唐代京師長安城為藍本，可不免會讓我想起如今的南京，那座六朝古都。千年的積澱，將其優美、悲美和壯美深深地揉入大和民族的骨血中。何妨聽一聽南禪寺的夜雨聲，端詳那似是而非的亭臺樓閣，身著美麗和服，體驗雨中漫步，貪婪地呼吸著那屬於京都的味道。我想，“行到水窮處，坐看雲起時”的日子也是值得擁有的。

然而與我理解不同的是，壽嶽章子將京都的“喜樂”毫無保留地展現給讀者。《喜樂京都》詮釋著這座城市的人倫暖意，原汁原味地還原普通人的小小幸福，從而匯成最自然鮮活的人生百態。當“京都交響曲”響起時，有人在驕陽烈日下推著笨重的小車，有人高聲賣叫，有人暈染布料，豆大的汗珠也抵擋不住淳樸的京都人為這座城市所留下的一筆一劃。柴米油鹽醬醋茶，琴棋書畫詩酒花，將一群群熱愛生活的人交匯在一起，何愁沒有慢板、響板、和音或是迴旋曲？應運而生的京都活在歲月長河裏，讓有意思的人和事被後世銘記。

澤田重隆的插畫更是為《喜樂京都》添磚加瓦，工筆劃的運籌帷幄，捕捉塵世間那一抹質樸和亮色，讓一幅幅畫與文字相得益彰。不禁讓我聯想起張擇端先生的《清明上河圖》，一幅畫卷折射出幾許人間煙火色，這種溫暖直達人心，恍若就生活在那個繁榮昌盛的汴京城，何其幸哉！

放下書本，宛如一場精神洗禮。我們用著自己的力量去維護那些還未被戰火或是推土機所掩埋的古跡，去追尋那些留在記憶裏的嗅覺和味覺。“人情味”這三個字在京都的生活中體現的淋漓盡致，讓人好生羨慕。如此有滋有味的生活，怎能不令人嚮往？

歲月流轉，霓虹不息。我想，是時候去一趟日本了。

附註：

1. 《源氏物語》— 紫式部
2. 《喜樂京都》— 壽岳章子、澤田重隆



## 风檐下的守望者

上海财经大学  
会计学院二年级生  
吳昭程

“物哀，风雅，幽玄，相位”

从素雅的窗格中看见的，越过优雅的窗格而洞察的，是孤独而坚毅，哀伤而眷恋的守望者。

当黑船来航，惊醒东瀛太平的梦境，如从一扇窗，瞥见两种文明交织的生活。相互碰撞而交流的生活，在现实与梦幻里，展开又一幅文明的画卷。

谁预想到，在一扇窗中，有着如此深沉的思绪呢？

日本的窗，从荒原中走来，是恬淡安宁的窗。

早期的日式之窗，与宁静的田园志向相伴而生。在竹林的辉映下，在庭院间的回廊中，听取蛙声，雨声，和潺潺的流水声。最是静谧之处，一盏茶，氤氲的水雾中，升腾起澄澈的茶香。茶与茶道，于是在举杯的瞬间流芳。所谓“一期一会”，不错的，放下纷争、冷漠、对立，相对于茶前，静心于不再重复的会晤。那时，禅宗境界，天人合一的情境，和平包容的乐趣，在这屋檐之下，窗棂之前，平静而充满期许。

遣唐使来唐朝，面对大唐盛世的文化，并非一切照单全收。他们选取禅宗的恬淡，作为平淡的水墨志向，收藏与民族的精神之中。大化改新以后的文明，在窗边留下一重历史的剪影，延续着田园牧歌式的水平志向。他们不崇拜伟大的苍穹，在广袤的土地与森林里，是百万神灵存在的地方。窗与自然相通，并无界限，并无障碍。在淡如水墨的生活中，窗内的禅意与宁静，融入窗外的蛙声与风雨中。仿佛是一扇窗，引暧昧的日光与月影追随；又如并没有一扇窗，正如文明与自然并无隔阂。

日式窗户采取平拉式，不同于欧洲城堡注重防卫，以重重铁栏森然戒备，他更像是一道宽厚的屏风。和煦的日光，穿堂的微风，总留下隐约梦幻的影，映出日式的暧昧柔软的审美境界。对于鬼神的平等，彰显于多神教的日本传统中，体现在窗的思想史中。所谓“鬼的眼泪”，即相信善与恶并非绝对，因此包容窗外的幽冥世界。不同于西方文化，以窗为恶魔进入的场所，于是深恶痛绝。

转过视角，凝望西洋之窗，在宗教的语境下，它自绝于上帝与崇高，是幽冥与鬼神来往的地方。

在多民族聚集的欧洲大陆中，战乱带来了自我防御的需要。防御也成为窗户设计的重点。西式建筑往往追求崇高，一方面，在于向往穹顶的上升志向；一方面，在于对上帝的宗教热情。窗户位于高处，也成为一个居高临下的窗口。不同于日式的平拉门，西方开门方向多由内向外，便于迎敌。易守难攻的城邦建筑设计，总与文明的侵略性相关。而近代以来，因资本主义的发展，对私密空间的诉求，体现在房间的设计中。西方的窗户，成为一个狭小私密的窗口，任由窗内人向外俯视，隔绝窗外人窥探的眼。从一方小窗，如此向外看去，却被分隔出一个窗子以外的世界，如同去静观人与人互不相通的悲欢。

自黑船来航惊醒大梦，田园的纸窗似乎破碎，象征现代的玻璃窗，盛行于维新之中。

学得玻璃制造技艺，又以“和魂洋才”重新熔铸。透明的玻璃材料应用于窗，带来了对外世界的透彻洞察。现代化的发展，建筑结构的更新，启发了日本社会的垂直志向。摩天大楼式的向往天空，以西方文化精粹的身份，进入原先的田园郊野，飞入寻常百姓家的生活。透明的窗，流线型的窗，伴随着电车与铁路，速度、效率、现代化的生活，在 20 世纪的日本昂首阔步、横冲直撞。

现代化并不总是从容安宁，文物的废墟里，藏着粉碎的、迷茫的国魂。当摩天大楼与透明的玻璃，更改社会生活的风貌，日本的原生文明，却应当何处安放？

日本以明治维新为号角，留下了一种答案。于是西化与现代化，如同一片天蓝的底色，为原有的文明，涂抹出更加纯粹的剪影。

仰望摩天大楼的崇高，无碍于眷恋田园风景的安宁；流行西洋文字的国际范，也体味茶道艺术的从容恬淡；如战争机器般扩张侵略，终学会对不同文明怀有尊敬；科技飞驰常伴有人心淡漠，自有禅宗智慧与体悟疗愈人心... 如一千三百年前创造片假名那样，“昌明国粹，融化新知”之后，又成为原生的文化，绽放出一种新的华彩。

一种文明，会有一种文明的光彩。但如光彩未现，落后于潮流，便伴随着文明的失落与痛楚。凝望无数流血的大地，战争如是，争端如是，误解与侵略亦如是。

于世界民族之林中，当寻得何种良药，为文明的创痛疗伤？

愿世间有一期一会的茶道，沟通世界文明间的误解与纷争

愿世间有淡如水墨的文学，传达物哀幽玄的片刻思绪。

愿风檐下的窗，成为和平的世界，那一双纯净的眼眸。

#### 阅读书目及参考文献：

“窗”的思想史—日本和欧洲的建筑表象论 浜本隆志 著

### 将美轻放在日本作家手上

武汉大学

信息管理学院三年生

劉雨賀

日本文学近年来愈发占据了各大书店的文学类书架，从最初的一面蔓延到多架似乎也不过是这三四年的事情。内容涉及极广，从诗歌散文到推理小说，也不乏绘本漫画。其读者层几乎可覆盖所有会来书店读书、买书的人群—上至黄发，下至垂髫，且都怡然自乐。

日本文学缘何有这么大的魅力呢？我思来想去得出了一个不甚靠谱的结论：是不是因为日本作家的多样性呢？仅就我读的较多的几位作家来讲，川端康成、三岛由纪夫、太宰治、松本清张、东野圭吾、辻村深月、伊坂幸太郎……随着一个个名字在心中浮现，各自特立独行的形象也在脑中溜起了圈。川端康成和三岛由纪夫兴致勃勃地探讨着文学理念，太宰治在旁边探头探脑，却碍于三岛由纪夫凌厉的眼刀和嫌恶的撇嘴难以靠近；松本清张与东野圭吾不紧不慢寻了套桌椅，二人各占一边，缓缓聊起了社会派与本格派的分歧及融合之路；而辻村深月和伊坂幸太郎很明显没那么讲究，随手找了几块垫子就席地而坐，你一言我一语地聊着伏笔、多视角穿插、反转在推理小说中的应用……时不时传出的笑声让整个空间快乐满溢。

我不禁继续着有趣的幻想——那么如果把同一个主题交给他们，他们又会有怎样的创作呢？不如就以文学界的亘古命题“美”来做题眼吧！

川端康成会怎么写呢？是岛村曾经看到过的“山野里的灯火照在姑娘的脸上”，还是初春“散发出浓烈嫩叶气息的后山”与“她的脖颈上，淡淡地映上一抹杉林的暗绿”？

如果是三岛由纪夫的话，不消说是金阁。是雪中的金阁“细长的柱子以其清爽的皮肤挺立着”，还是台风前“镜湖地的水草上闪烁着月光，虫声和蛙鸣此起彼伏，占据着四周”，抑或是放火前“薄木修葺的屋顶高耸，金凤凰连接着无明的长野”，想必他也颇为纠结吧。

太宰治谈起美，先想到的可能是那件广为流传的“新得到的适合夏天的浴衣”吧，毕竟美到可以为此多忍耐半年生的痛苦。又或者是“浅牡丹色的、同灰色的阴雨天空融为一体，形成柔和得妙不可言的色调”的毛衣？它出自“真正的贵族”母亲之手，其中的谐调是天地自然之美的彰显。

剩下的推理作家又会发表怎样的高见呢。松本清张也许会提到照子和耕作去寻找森鸥外踪迹时去过的山林吧，“山路两旁堆积着落叶，冬阳从树叶落尽的光秃枝头之间洒落。行动不便的耕作被照子牵着，她的手指柔软又温暖，还带着年轻女孩特有的甜美气息。”他这么说。

东野圭吾应该会微微一笑，露出赞成的神色，想起他作品中与此似乎有所呼应的情节：数学教师石神的寻死被新搬来的邻居的门铃声打断，拉开门的瞬间便被美贯穿。“怎么会有眼睛如此美丽的母女”、“他从未被任何东西的美丽吸引、感动过……然而这一瞬间，他全都懂了，他发觉这和求解数学的美感在本质上乃是殊途同归”。

小一辈的辻村深月和伊坂幸太郎继续着七嘴八舌的探讨。“是诸事大吉之日发生的一切吧？”辻村首先发声。“啊，我倒是觉得美应该诞生在某个不为人知的小岛上呢。”伊坂不甘示弱。“落日时分吗？”“嗯，有鸟和稻草人。”“那也应该有欢笑的人群！”“啊啊，那就是如此吧。”

当然以上全部都是我依靠阅读得来的想象罢了。从未在现实中谋面的作家仅凭文字就可以在读者脑海中栩栩如生，不得不说这便是文字的魅力。而之所以能形成如此鲜明的作者形象则是由于日本文学、日本作家的特点。

他们不惧怕在文字中流露自己的一切。生死观、审美观、人生观、价值观……其中最常被提起的就是生死观与审美观。二战后，美国文化人类学者出版了一部分分析日本国民性的专著，

名为《菊与刀》。“菊”指他们恬淡宁静、热爱艺术与美，同时性格中也不乏“刀”一穷兵黩武且时而变态至极。当然其中有些片面思考，但同时也颇具启发性。

如果让我用两样事物描述其国民性，我会选择“樱与刀”。

樱花是日本最具代表性的花卉，每年春天持续整季的赏花大会基本是日本人必参加的群体活动。与家人、朋友、同事围坐樱花树下，满开的樱花在风中四散，部分吹落在地，部分随波逐流，将物哀之美演绎得淋漓尽致。他们喜欢“盛极而衰”、好比花火和樱落；喜欢“不长久”和“残缺”，好比谨遵侘寂原则的茶器与庭院。但矛盾性就在此刻体现，他们不是佛，不能真正接受随缘而定，“刀”的一面随之显现，用极锋利、极舍身的方式去维护来之不易的、易逝的美。求与求不得被日本作家构建为一种更为悲伤的、更关花鸟风月的风格。推崇着美却不忍直说，只敢环绕四周，用最天然、最轻柔的自然风景将其包裹，用委婉的辞藻辗转表达，生怕一点点多余的、喜爱的呵气都会吹散美的神韵。其难也如此，哀也如此。

所以，请务必将美轻轻放在他们的手上。

## “现在=此处”

北京大学  
人文学部二年级生  
劉立杰

作为一个自小读中国近体诗的人，刚接触到俳句时，我是颇不屑的。短短的十七个音便组成了一篇文学作品，没有起承转合，没有重章叠唱，甚至没有对仗。作为文学体裁，是不是失去了艺术的价值？

但是俳句，越读越让人入迷。松尾芭蕉言：“物之所见之光依然不消于心，宜言止。”俳句就是一种瞬间的艺术，所有的时间在句子中静止，留给读者的却是无尽的感触。俳句不需要多么精巧的构思，当你走在街上，看见春光穿过树林，又或是听见秋风掠过树梢，你的心里有所感觉，一首俳句便诞生了。

加藤周一说，俳句是关注“现在=此处”的作品，也是“日语抒情诗形式历史发展的最后归结”。其实，按照加藤的意思，俳句不仅是日语抒情诗的归结，也是日本文化的缩影。

被誉为当代日本“百科全书式”学者的加藤周一，在88岁时写出了《日本文化中的时间与空间》一书，他在后记中写道：“本书是对作者关于日本思想史思考的一个总结。”在书中，他结合日本文化的方方面面，并对比东西方其他国家的语言、历史，详细阐述了日本文化“现在=此处”的特性。他写到了日语中动词后置的独特结构，写到了日本的传统村落与锁国，写到了茶室、神社、天守阁，也写到了“老江户没有隔夜钱”与福泽谕吉的“大势主义”。行文轻松，涉及面广，将我所读过的知识串连起来又补充了许多新鲜的内容，使我深受启发。

日本文化之初起，似乎可以上溯到律令时期。日本从当时的唐朝学来了一套基本的国家制度，至此便稳定发展起来。尽管中国的文字与近体诗也在同一时间进入了日本，二者的文化底色却截然不同。日本的文学经典如《万叶集》与《源氏物语》，蕴含着一种被后世称作“物哀”的元素。大西克礼在《物哀·幽玄·寂》中讲到，“物哀之情”便是“知物之心”，知道外物现在很美，也知道外物随时会凋零。于是，一种无可奈何但又追求极致唯美的境界便被打开了。这一时期的散文特点最为突出，《枕草子》所记载，不过是宫廷日常生活之二三事，却每每能在瞬间打动人，并流传至今。

贵族时代在几百年后被武家终结，日本文化中“现在=此处”的特征却没有发生变化。北条家族本尚节俭，建造武家府邸时开启了“扩建”的建筑原则，并不会事先对整体进行规划，而是依用而建，随时扩建。所以武家府邸一般不会呈现出对称布局，这是注重眼前的观念所造成的。武士之间的“下克上”也时常会引起政局的动荡，时人多有如《徒然草》一般“人生无常”之叹。这些观念暗中又强化了日本的文化特征。

武家与禅宗的合体，最终将“现在=此处”的文化特征推向了极致。铃木大拙在《禅与日本文化》中介绍，“‘悟’即‘禅’，是不依赖于概念直接到达真理”，而“日本人的心理优势在于直觉地抓住最深刻的真理，借表象将其清晰的实际表现出来”。有着“现在=此处”文化基础的日本人是善于参禅的，并且在禅的基础上，日本人发明了茶道、花道、武士道。这些文化支系，触及的都是禅宗“悟”的体验，即要求达到“无心之心”，在瞬间里进入无意识。禅宗完成了日本文化的哲学化，让人能够超脱时间与空间，与此同时，其文化基础“现在=此处”，也进一步被深化，进入了民族性格中。

日本文化的“现在=此处”特征所带来的成就是有目共睹的，日本人将自己的文化打造成了一颗钻石，每一个细小的切面上都光艳动人，每一个瞬间都无比夺目。但这一特征带来的并非全是益处。

丸山真男在《日本的思想》中提到，日本思想史研究面临着诸多困难，而没有一个一贯的思想体系是造成困难的原因之一。诚然，由于“现在=此处”的文化特征，传统的日本人好像并不善于进行哲学思考，也很少会出现举世闻名的思想家。同时，由于关注“现在=此处”，日本人善于变通，随时准备着转向，而不是固执地坚守着一些价值，这样的行为也为日本在道义上招来了些许批判。

世界文化精彩纷呈，需要更多的了解，也需要更多的交流。

阅读书目：

《日本文化中的时间与空间》，【日】加藤周一 著，【中】彭曦 译，南京大学出版社

参考文献：

《物哀·幽玄·寂》，【日】大西克礼 著，【中】王向远 译，上海译文出版社

《禅与日本文化》，【日】铃木大拙 著，【中】陶刚 译，生活·读书·新知三联书店

## 孤岛

華東理工大学  
外国語学院三年生  
方晴嵐

听闻过往，十忆九伤；听闻世态，实在炎凉。

听闻旧友，十人九忘；听闻生活，实在无望。

听闻都市，十言九悲；听闻人生，实在离殇。

读《都会中的孤岛》，实在让人惊艳。整本书笼罩着淡淡的灰色，扑面而来的是战争后的沧桑感和厚重感，人们在俗世尘埃中彷徨，徘徊，苟且，堕落，救赎。

平凡的生活中蕴含着出乎意料的结果，人生终点的死亡忽然成为平庸人生的出口，正确的选择得不到理想的结果。无论是《玩具箱》中庄吉抱着以前的成绩坐吃山空还没责任感不知廉耻的喝酒玩女人，还是《水鸟亭》中好不容易做了个大地主却因为脑子不活络羡慕乞丐最后自缢于鸡舍的梅村亮作；无论是《白痴》里误以为被爱的白痴女人和渴望肉体的男人，还是《都会中的孤岛》着了美也子的道做了替死鬼的阿弁。每个人都有每个人的悲哀，恶俗的作家固然因为梦想的破灭而终结，不作为的村长终究无法理解他关心的人，战争里的人连平庸的资格也没有，谁又看得透他的爱情？

这一切的一切仿佛印证了书名《都会中的孤岛》，他们都在过着活着混着自己的生活，在自己那间封闭漆黑看不到希望和未来的屋子里，执着于自己所执着的，将自己缚作泡沫般的茧，天堂与深渊同在。

整本书似乎让我想到无赖派的代表人物太宰治先生的“生而为人，我很抱歉”，那种自嘲和自虐的态度，病态和阴郁的东西，在堕落中堕落到底也毫无意识的孤岛感深深令人惊异。但个人觉得这种隐喻却更是体现出作者内心的批判和推翻。

文学来源于时代，作品来源于生活。这部作品，就像是第二次世界大战后部分人部分生活的缩影。封建的旧制度，迷茫的新时期，新旧价值观的冲突，也许堕落的本质是希望，批判是为了重生，否定是为了期待。于漆黑世界里期盼光明，本身就并非易事。堕落并非是堕落，也许人需要在正确的堕落道路上，发现自我，救赎自我。这本质上并不是悲观的态度，无赖派也不是颓废悲观的代言人，这些看起来让人如同置身深海般压抑的文字，只是寻找真实的表象，以此来恢复人的本性，推翻过往，寻求真相。置之死地而后生，处之堕落而觉醒。

我在学习品读这本书的过程中，逐步学习体会大和民族。日本人骨子里的那种暧昧，理性感性得刚刚好，孤独热闹得刚刚好，克制，冷静，追求以心传心，礼貌待人，细致完美，却又有逃脱不开的距离感。通过敬语和礼仪等方式，压抑内心，而情感却在细微之处表达出来。作者通过下层人士的生活，一丝一扣地将那种自嘲和忧郁展露无遗。而小人物的内心起伏，压抑中的无奈，一切都表达地自然却又深刻。

这本书不仅具有回顾历史，思考曾经的意义；而且还能够透过这本书感受当下日本人的生活状态，正如书中所说，“许多人即使身处都会正中央，也像是生活在孤岛之中。他和她们会

乘着电车和巴士去上班，去购物，但这只是去外面走一圈而已，不少人的个人生活过得完全就像住在孤岛上一样。”这段话即使拿到如今的日本也值得深思。

日本经济新闻调查后指出，日本男性是世界上最孤独的族群。不仅是日本男性孤独，日本儿童也是世界上最孤独的。日本人的孤独感仿佛是与生俱来的，受岛国环境、思维形式等的影响，日本人把内心的孤独当成常态，却十分害怕在群体中感受到孤独感，因为那将意味着自己被边缘化，他们会在内心体味孤独的同时想方设法融入集体中去，哪怕只是个假象，也要融入到集体中，对所有人都是礼貌微笑，绝不坦露真情。近藤大介在书中说：“然而如今东京的街道，只有安静、干净和‘成熟’。”日本人习惯伪装自己，不打扰别人，悲伤也好，喜乐也好，静静的。眼前风起云涌，面上平静如水。

这种带有淡淡消极感的孤独随着时代的发展逐步演变成为了如今我们说的丧文化，它反映出当前青年的精神特质和集体焦虑，在一种程度上是新时期青年社会心态和社会心理的一个表征。大多数的年轻一代，他们感到丧的原因主要包括单身、房价、工作等。在年龄增长面前，生活困境所产生的焦虑和无力感，使新一代的年轻人选择了这样的一种表达方式去宣泄一种生活上的空虚和不满。而在这背后则是年轻一代对社会温柔的反抗。“丧”文化虽然看似悲观、颓废，但在颓废之中也展露出一些与压力重重的生活进行对抗的乐观心态，其实还是对生活充满向往的。

罗曼罗兰曾经说过“世界上只有一种真正的英雄主义，就是认清了生活的真相之后依然热爱”。可以丧，但不会绝望；可以孤独，但不会因此放弃生活。哪怕身处孤岛，不怕诚实的堕落。

喷薄欲出的孤独沉浸其中，面对生活的一地鸡毛，真正的期待才开始浮现。

悲观颓废的空虚扑面而来，面对困境的焦虑无力，真正的反抗才开始上演。

为天地立心，为生命立命，为往继绝学，为万世开太平。

为时代立心，为生活立命，为未来期望，为光明而反抗。

所阅图书：坂口安吾《都会中的孤岛》

# 「“本を味わい日本を知る” 作文コンクール 2019」

(中国語版)

二等賞作品

(中国語原文)

## 向死而生

福建師範大学协和学院

日语专业四年生

黄少婷

去往地狱，路过人间。《人间失格》主人公叶藏迷茫地被帶到这个虚妄的世界，怯懦又软弱，习惯用技巧讨好他人，借以来触摸自己真正存在的温度。不知“爱”为何物，却无休止地寻找爱，寻找真正的自己，最后深觉人间太苦，想极力将自己从这个世间抹去，于是选择死亡，去往地狱。

失格，即丧失做人的资格。伪装，阴暗，堕落，自杀。一个极端讨好型人格的人间磨难，叶藏的多数经历与太宰治相似，同样找不到人生意义，逃避现实，自我沉沦，最终自我毁灭。

“我最大的不幸，就是缺少拒绝的能力。我害怕一旦拒绝别人，便会在彼此心里留下永远无法愈合的裂痕。”“从孩提时代起，我就一直在讨好周围的人，这是我对人类最后的求爱。”为了讨人欢心，故意说笑话，为了迎合父亲的心理，故意选择自己不喜欢的礼物。对讨厌的事物不能说讨厌，对喜欢的事物不能说喜欢。正是这种“讨好型人格”，他的一生都充满了“耻辱”。一个不会拒绝的人，之所以不敢拒绝，是因为恐惧人性，他不知拒绝会给自己带来什么样未知的伤害，这要比眼下的不拒绝所承受的可知伤害可怕多了。敏感的人会被动性洞穿对方的难处，即使委屈自己，也总想着为对方分担一些，往往敏感的人在事情未发生之前便提前自我创造了痛苦。正如太宰治在《候鸟》里曾言：“太敏感的人会体谅到他人的痛苦，自然就无法轻易做到坦率。所谓坦率，其实就是暴力。”所以那些共情力弱的人，是很自私光明地幸福着，也因此叶藏对待人世间的态度是消极和悲观的，他任凭自己一点点在深渊里沉沦，却无一丝想要救赎自己的念头。所谓自杀者不是不怕死，只是更惧怕生罢了。

叶藏曾说过：“我知道有人是爱我的，但我好像缺乏爱人的能力。”从小到大，叶藏从未感受过来自家庭及学校的温暖，他恐惧与家人一同进餐，因为那是一个庄严肃穆的仪式，只有一张张只顾扒饭的脸。他生性寡言，害怕冷场，总是率先讲笑话逗笑众人，卖命演戏讨好老师同学，而他们也只是照单全收而已。其实丧失为人资格的人并非叶藏，而是那些最应该爱他，却吝啬地不愿意爱他的人。



“我们长期以来的想法和感受，有一天将会被某个陌生人一语道破。”初读《人间失格》便给我这样一种感受，恍若两个相似的孤魂碎片在这光怪陆离的世界里相遇相拥。以致于在读完后的很长一段时间里陷入阴郁压抑的状态，但同时这种压抑引人深思，思考“生”的意义，最终予人以“生”的启迪。

加缪曾在其随笔《西西弗的神话》中写道：“真正严肃的哲学问题只有一个，那就是一自杀。”也就是说，我们为什么要活着，为什么不能选择自杀。叶藏选择了自杀，因为他活着的时候没能感受到温暖，既然无法与自己和解，那就自我毁灭。而我们活着，是因为我们感受到温暖与爱。当然，从作者的角度看来，既然世界是荒诞的，必然存在一种面对这个世界的态度，因此加缪将其分为三类，第一种态度是肉体上的自杀，既然无法与世界和解，那就以自杀完结。第二种态度是精神上逃避现实，寻求宗教庇护，即精神上的自杀。但依靠自杀这样荒诞的行径摆脱荒诞，显然不能真正解决问题，故加缪所主张的第三种态度，即坚持奋斗，努力抗争。

在国民自杀率一向偏高的日本，“向死而生”，是根植于日本人生死观中的执念，甚至认为“再没有比死更高的艺术了。”大和民族的基因中，充斥着对悲剧之美的追求，在川端文学里，死具有重要的美学意义。所以日本现代文人中太多自戕之举，芥川龙之介、川端康成、三岛由纪夫等均是此中之辈。以昭和十二年为界，日本战前战后变故太多，日本文明瓦解，国家被迫转型，左翼妥协，普通民众的生命信仰亦遭到前所未有的动荡。于是不抵抗，成了大多数人的选择。作为战后的文学家，他们也许想要唤醒什么，对颓败现状做最后的挣扎，又或许他们自己分明就是被战争摧毁的产物。

在2013年中岛美嘉发行单曲《曾经我也想过一了百了》后，日本国民自杀率创历史新低。中岛美嘉在事业如日中天时，患上了咽鼓管开放症，医生给出的诊断结果是：无法治愈。一个歌手辨别不出自己的声音，等同于宣告自己职业生涯的死刑。而失聪的她并没有放弃，用脚打着拍子，嘶吼唱出那首她的真实故事《我曾经也想过一了百了》。歌词末尾：“因为有像你这样的人活在这个世上，我对世界稍微有了期待。”虽然人类的悲喜并不相通，成年人的孤独是悲喜自渡，但我们可以允许自己放声大哭，允许自己任何时候没有来由的丧，同时也要找到救赎支撑我们活下去。

太宰治在《晚年》中的一段话：“我本想这个冬日就去死的，可最近拿到一套鼠灰色细条纹的麻质和服，是适合夏天穿的和服，所以还是先活到夏天吧。”这是身处绝望中的温柔啊。倘若轻易地结束自己的生命，而往后多少柔软美好的时日也终将错过。即使你曾经也想过一了百了，但仍旧希望你再看一看这世间的美好。

生而为人，请一定好好活着！

## 孤独的“陪跑者”

复旦大学  
民商法修士三年生  
王施施

从2006年起，村上春树便是诺贝尔文学奖候选名单上的常客了。只可惜，这么多年却总是与大奖落寞擦肩：即便2017年的诺奖花落这一衣带水的友邦，于村上春树而言，不过又是一场赔率尴尬的“陪跑”。

虽然不受诺奖钟爱，其在国内的知名度却丝毫不亚于川端康成等诺奖“宠儿”：提起日本作家，村上春树总是能名列前茅，所吸引的忠实粉丝恐怕也是有过之而无不及。对于国人而言，村上春树就仿佛是在水之湄的“王小波”，像极了一座造型奇诡的灯塔，不自觉地牵引着躁动而不安的灵魂；又像是时刻准备敞开怀抱的学校，以超脱而决绝的坦诚安放一代代年轻人漂泊、动荡的青春年少。

在中学老师和家长的眼里，村上春树的作品似乎不是多么有益的“补品”，甚至是谈之色变的“禁书”。但这并不妨碍它成为青少年心头的“朱砂痣”。犹记得初中的时候，我有个要好的朋友——一个勇敢而有着奇妙幻想的姑娘，温婉的外表下蛰伏着强而有力的灵魂，像一只小兽般随时准备亮出稚嫩的利爪；而那本小小的《挪威的森林》就像是《红楼梦》中的《西厢记》，不仅惹得她手不释卷，也是她向庸常生活宣战的旗帜。

如果说川端康成是典型的日本本土作家，澄澈、清冽而又温情脉脉；村上春树则更像一个沉默的“反叛者”。尤其是其前期的作品，往往显得不那么“日本”，带着对欧美作家的致敬，村上春树恰似手执舶来的手术刀对着熟悉的社会冷峻地抽丝剥茧，其所反映的意识和自觉也让不同时空、语言、肤色的读者都可以找到一面关照自身的“镜子”，不可抑制地产生共鸣。

村上春树的笔下鲜少有惊天动地的英雄，或是澎湃人心的传奇，而多是在生活中与我们匆匆擦肩、面目模糊的普通人。这些角色从来不曾臻于完美，懦弱、自私、无知、甚至不那么道德，在生活的漩涡之中打转、在百无聊赖的欲念中沉沦，像极了庸常的你我。

而这些角色最为突出的一点便是“孤独”。可以说孤独一直是村上春树小说的母题，“人生来便注定会失去一切，消失，完全地消失于虚无，从入口进来，从出口出去”，“城市依序消失，是的，这里没有我的位置”、“哪里会有人喜欢孤独，不过是不喜欢失望罢了”……不论是渡边、天吾、多崎作、卡夫卡，还是初，每个人都在时代洪流的裹挟之下，于困惑和挣扎中思考着自我和他人、个人与社会的关系。虽然每个独立的故事里，主角们被冠以不同的名姓、各异的背景、多样的社会关系，但热切而恣肆的孤独却始终像一堵高墙，隔开他们无比充沛的精神世界与喧嚣热闹的世俗生活。

孤独来源于自我意识的觉醒，明白人与人之间无可奈何的隔阂，了然归根结底每个人都只是孤身一人。所以，与其说是小说，是墨笔铅字上的纵横捭阖，不如说更像披着虚幻情节外衣的个人独白，而发声者既是作者，也是我们每一个人。

孤独的滋味并不好受，像是溺水，让人愤怒而绝望，悲戚且自怜，英国诗人约翰·多恩曾在贫

病交加中呻吟“没有人是一座孤岛”，萨特则嗔笑道“他人即地狱”；可一贯深居简出、沉默寡言的村上春树却说“孤独一人也没关系，只要能发自内心地爱着一个人，人生就会有救。”这从不曾百分百绝望的心情似乎又是非常“日本”的。似乎没有比日本人更懂得、也更在乎心灵羁绊的人。知乎上有一个热门的讨论话题“为什么日本人如此冷漠，却可以制作出大量感情丰富的动漫？”也许，这一设问的前提便是错误的，正如同为日本作家的太宰治所言“太敏感的人会体谅到他人的痛苦，自然就无法轻易做到坦率”，恰恰因为习惯为他人着想，让他们像刺猬一般无法天真而光明地自私着、幸福着。日本人从来不是真正的冷漠，克制而疏离的外壳之下，流淌的是细腻而敏锐的真诚。

与加缪的《局外人》、黑塞的《荒原狼》、太宰治的《人间失格》不同，正是这种对自我的克制和激流暗涌的温情，让村上春树的作品不涩口得多。而人生路上的村上春树，同样不只是冷眼旁观的局外人、徒劳无功的“陪跑者”，恰恰是作为平凡而可贵的普通人，一直不知疲倦地奔跑在路上：虽然大器晚成，29岁才开始创作，却笔耕不辍，长达四十余年；从1982年秋就开始跑步，每天十公里……

人生总是孤独而迷茫的，这片广袤无垠、亘古不变的星河曾千百万年地见证过同样的情绪在一代又一代的人身上上演，何曾相似的面孔、多么熟悉的心路历程，或许唯一的区别就是他们手上捧着的是《少年维特之烦恼》，还是《麦田的守望者》。我们这群手捧村上春树小说、不被看好的一代，似乎终于也都平安而朝气蓬勃地长大了，学会不情绪化，不偷偷想念，做“一个不动声色的大人”。而在人生这趟无返程的高速列车上，村上春树所言传身教教会我们的：或许就是带着疑问尽情地舞蹈，在凶顽的世界中孤独而倔强地努力着，热切又冷峻地期待重新相逢。

## 向死而生与物哀之美：東野圭吾笔下的“罪”与“命”

暨南大学

海外華人文学博士二年生

李宜萱

对社会问题与人性黑暗面的关注一直以来都是日本推理小说的重点，但与其他本格派推理小说家不同的是，比起诡计而更看重疼痛的东野圭吾，“他写人性中的爱情、亲情、友情，写人性被扭曲之后的种种异相，也写那种生而为恶的反社会人性。”自从鲁思·本尼迪克特的《菊与刀》问世以来，海内外学者对于日本文化就有了一种获得了大多数认同的概括，即“耻感文化”，但东野作品对于疼痛的关注，主要体现在对幽微人性的挖掘，而这些被袒露在读者眼前的人性阴暗面，其内核就是一种结合了宿命论观点的原罪意识。

二战后作为战败国的日本在政治与文化上都受到了来自西方社会近似侵略的猛烈冲击，

新旧伦理观念碰撞得火花四溅，也许正是因为对这些变化的亲身经历，才使得伦理观在东野圭吾作品中复杂且复合——在他的笔下，施害者往往也是受害者，那些惨淡真相背后又揉入了些许温情，恶人的善意与善人的恶意反复碰撞，正义与罪恶也总是交织在一起。《白夜行》中的桐原亮司和唐泽雪穗，《幻夜》中的水原雅也和新海美冬，《圣女的救济》中的凌音，《大雪中的山庄》中的麻仓雅美等，他们无一不是在实施犯罪的同时也是另一场罪孽中的受害者；或者说，正是因为他们曾经的受害才导致了他们后来的罪行。在其作品的世界观里，“罪”就是“命”，“命”也是“罪”。宿命是原生的，是不可更改的，因为人无法预知自己的遭际；但如何去接受命运，如何去承担或是面对，却是能够选择的。对于东野而言，即便接受了西方“罪感文化”对于人性本恶的设定，也不会全然相信人性内在自省的效力。因为“罪”是“命”，所以在他所描绘的日本社会里，如果外在的审判没有到来，施加罪行的人会一直选择逃避，而外在审判到来的时候，却往往不能够彻底解决问题。因为“命”也是“罪”，所以正义在东野圭吾的笔下是如此苍白疲软，有时迟到，有时缺席。

人性本恶注定悲剧的宿命，对这样的观点，东野似乎深以为然，却又不肯放弃对人性尚存善意的希望，一桩恶行也可能包裹着善意。诚然，在其作品中不乏救赎与自我救赎的尝试，但起因并非“罪感文化”中自发的，由心而生的道德感与愧疚感，而是饱尝了人间冷暖，受尽了侮辱孤寒后的挣扎。刘小枫将在世态度分为三类：基督教为代表的宗教解救态度，以古典儒家为代表的道德形而上学态度和以道家与禅宗为代表的审美超脱态度。比起自知有罪而受到内心审判而产生的救赎行为，以及纯粹的“乐感文化”中自由无碍的逍遥境界，或是积极入世的道德形而上学价值观，东野对悲剧命运的理解和对抗方式十分复杂——首先，他认为人生而有之的劣根性和阴暗面导致了不可摆脱的宿命悲剧；其次，无论人是否接受现存的世界，都必须且无可避免地去面对自己绝望的命运，祈祷是不能解决任何问题的，人必须尝试解救自己；最后，惨淡与残酷是普遍存在的，自我救赎与对他人的救赎十分有限，正义并不总是会如期而至。

我们不能因此就认定东野对于人性，或人抗争宿命的可能性持悲观的态度，毋宁说其呈现出来的“悲观”，是日本传统美学中的“物哀”，即主体与客体间的共情，“哀”并不特指悲伤的情绪，而是指代所有能由外界而自然生发的感情。倒不如说他惯于将人性的暗点放在阳光下解剖，将虚伪、欺骗、贪婪、嫉妒、自私、暴力、冷漠全部摊开，赤裸裸地暴露在日光与目光之下，以悲剧和丑恶带来的巨恸去撞击人心。他不相信道德伦理或是祈祷忏悔能够救赎人的灵魂与肉体，也鄙弃消极避世的态度，而是宁可让现实被抠挖得血肉淋漓，以期求这种惨烈能够换来人们对于自我、社会等各方面的重新审视与再寻出路——唯有接受、面对、抗争，才能终获解脱。

孔子说“未知生，焉知死”，活着的事情尚未搞明白，就难以去理解死亡的世界。海德格尔却说“向死而生”，从死亡的无限中去寻找生的可能，去证明存在的价值。与孔子、海德格尔都不一样，佛家总说“念”：一念生，一念死；一念未灭，不可成佛。都说“人死如灯灭”，是不可停留的刹那，死了即死了，是完成时态，人怎么可能留住死亡的脚步，使之成为进行时态呢？《沉睡的人鱼之家》探讨了普通人很少会考虑到的“脑死亡”和“心脏停跳”之别，就是东野寻求宿命解脱的方向——一生与死的界定，往往就在一念之间，他把这个问题小心翼翼地捧

在手里交出来，试图使我们相信死亡不是瞬间，不是终结，也不是彼岸。生命是条环线，更接近于一个莫比乌斯环——充满了相对性与转折，分列于两面的“生”与“死”看似永远不相交，却总能在某个关口彼此照见。正因为“死”的与否存在于人的“起念”，所以唯有从内心真正地去接受“死”，它才能如期而至。就像是人的“罪”与“命”之交缠，只有真正地面对、接受，经历了对宿命的彻悟，才能够获得永久的解脱。

## 病隙，闲看一个人的好天气

北京大学

核技术及应用专业博士二年级生

杨志涛

### 一 读青山七惠《一个人的好天气》

秋来了，暑热尚未消退，然而早晚温差明显加大。昨晚整宿疲软烧灼、辗转反侧，我知道，它又迈开了摧残万物步伐。告了一天假，一个人去医院，一个人挂号、排队、看病、拿药、喝水、服药、睡觉，醒来还是一个人。室友回家了，爸妈远在千里之外，同学和朋友都忙碌在自己的轨道上，我其实是不想因为一点小事打扰任何人。这个过程，像极了书中的老太太荻野吟子，安静地蜷缩在一个角落完成自我的愈疗。

18至34度，空气质量指数24，今天真是一个好天气，窗外的阳光洒进来落在书桌上，然后从桌面向地面缓慢地移动，时间在这种空空如也的状态下流走。清淡的晚饭后，恢复了不少往日的精神和气力。很早就看到了征文公告，跃跃欲试却又言不知何起，这种感觉，像极了书中的知寿在笹冢站初遇藤田时的砰然心动与手足无措。既然今天的好天气与书中的好天气撞了个满怀，高度契合的氛围浑然天成，那就正好提起笔写点什么。

既简单又复杂，既明媚又忧郁，既纯洁无暇又邪魅狂狷，你的名字叫日本。实话实说，我接触的日本文化并不多，但是见微知著，从看过的日本文学影视作品中，我感觉似乎每一个年龄阶段的人都能在其中找到对应的精神皈依：十岁上下的孩子在宫崎骏的童话世界中嬉笑打闹，十五六岁的少年在新海诚的魔幻现实中伤春悲秋，二十岁左右的青年在村上春树的挪威森林中悲欢离合，三四十岁的中年在川端康成的雪国秘境中意乱情迷，凡此种种，不一而足。无论哪个年龄阶段，物哀审美下的孤独与成长似乎是这些文学影视作品一致的立意。作者青山七惠在创作这部作品的时候正值二十岁出头，这部作品的主人公正值二十岁出头，我也正值二十岁出头，三个生命中最美好的年纪的相逢，与其说是巧合不如说是缘分。更巧妙的地方在于，书中安排了七十岁出头的荻野吟子与二十岁出头的三田知寿相处于同一个屋檐之下，青葱与迟暮有时是和谐的交响，有时是鲜明的对比。

这部短小而清新的作品从主人公三田知寿的视角展开，一瞥新千年之后日本年轻一代的一种比较普遍的生命状态，这种生命状态的主题是孤独与虚无。一直认为马尔克斯已经把生命的孤独写得淋漓尽致了，但是青山七惠却于细微处用孤独轻轻触碰到读者脆弱而敏感的神经。吟子生病后独自安静地躺了四天直至病愈，在这里我看到的更多的是顽强；知寿癖好悄悄偷走并暗自收藏别人的小物件，在这里我看到的更多的是孤独；吟子在去参加老年舞会前一定会穿着打扮得整洁漂亮，在这里我看到更多的是体面；知寿喜欢在吟子面前装作不经意地炫耀自己光滑的皮肤和精致的妆容，在这里我看到的更多的是虚无；吟子在一餐一饭、一来一往中恬淡经营着与芳介老先生的黄昏恋情，在这里我看到更多的是尊重；知寿在结束了与阳平若即若离的恋爱关系之后很快又与新男友藤田走到了尽头，在这里我看到的更多的是孤独；吟子是没有子女也很少有朋友的独居老人却生活地有声有色，在这里我看到的是鲜活；知寿与母亲感情淡薄、不愿学习深造而打临时工，在这里我看到更多的是虚无。

新闻偶尔报导，在当代日本，人口老龄化、年轻人低结婚率、社会少子化等问题日益严重。日本宅文化盛行，越来越多的年轻人更愿意在虚拟世界中排解孤独、在短暂的肉体欢愉中填补虚无，而不愿意在现实世界中结交朋友，尤其使建立稳定的亲密关系。反观中国，这种孤独感和虚无感也正在年轻群体中扩散，与其说这是来自邻国日本的传染，不如说工业化、信息化和经济发展到一定程度之后的社会都会从内部滋生出相似的困境。在我看来，年轻人这种孤独与虚无，直接原因是不能承受的生活之重，诸如固化的社会阶层、压缩的晋升空间、繁重的工作压力，根本原因其实是不能承受的生命之轻，因为健康靓丽的年轻身体、肆意挥霍的旺盛精力、理所当然的外界关怀。在凝望深渊的时候深渊也在凝望我，作为年轻人，我偶尔也会陷入这种没有过去、沉醉当下、不计未来的生命之轻中。

小病提神，处于现在这种将愈未愈的间隙之中，我感觉我开始打破这种生命之轻了。当不再翻腾的肠胃可以欣然接纳软糯的米粥时，我感受到了一粥一饭的不易；当不再灼烧的皮肤可以亲密接触棉质的被褥时，我感受到了一丝一缕的珍贵；当不再短促的呼吸可以均匀呼吸优质的空气时，我感受到了一动一静的和谐；当不再肿痛的喉咙可以轻松哼唱熟悉的旋律时，我感受到了一词一曲的美妙。在这种转变中，书中的孤独和虚无得到了净化与升级：我一个人吃饭、一个人睡觉、一个人阅读、一个人思考、一个人学习、一个人运动，其实是在孤独中成长、在虚无中进步，只为了使一个更加优质的我，与一个同样优质的你，在更加优质的生活中相遇。

青春的迷茫期就像经历一场重感冒，到底还是要靠自身的免疫力战胜一切的，愈疗的过程才是真正的一个人的好天气。

## 亲爱的知惠子

華東師範大學

歷史學四年生

呂玉琳

亲爱的知惠子：

你好！

自横滨一别，已经有了些时候。当时，北野天满宫的白梅开得正好，我从横滨乘夜行大巴前往京都，慕名拜访。然而现在，已经是全国各地桂花飘香的季节。多日未见，不知近况如何？

今日写信与你，是想谈谈我近来读的书。每每撰写读书笔记，总要遵循许多条条框框，还要陈列参考书目，令我头痛。诚然，每个人撰写读书笔记的方式总有不同。有人喜欢逐句摘录，将自己心仪的文字小心收藏；有人喜欢提纲挈领，将书籍的主要观点一一陈录；有的人喜欢天马行空，随意挥洒自己得到的收获。然而我想通过写信的方式，将自己杂乱无章的想法简要谈谈，也免了自说自话的寂寞之苦。

此次我读的是家永三郎先生的《日本文化史》。这本书我曾读过一次，不过其中内容已尽数遗忘。今日旧书重拾，顿时觉得似逢老友，过去的想法又翻涌而来。

家永三郎先生是以时代为序撰写此书的。每个时代的生产力不同，每个时代便只能创造出符合本时代的时代特征的文化，如武家特色的能剧和狂言形成于南北朝，充满市民文化特色的歌舞伎和假名草子则出现于市民阶级繁荣壮大的江户时期。我们生活于现代，眼界所及之尽头皆是现代人所及之尽头。我常常觉得，古代人的思维方式与我们的思维方式往往天差地别。一个人只有不断地了解不存在自己思维方式内的世界观和价值观，提高自己对这些世界观和价值观的理解程度，才能够明白自己的灵魂深处到底需要什么。当一个人面对文化与思维上的冲击时，要么选择接受、改变自己，要么选择继续坚持自己的思维方式。毕竟，并不是所有过去遗留的观念都有被接受的必要。也就是在这种取舍之中，一个人才能不断地成长。现下的人喜欢讨论一些事情的意义，我觉得这大概就是学习历史、了解过去文化的意义吧。其实有时，旅行的意义也是相似，只不过这种扩大是空间上的而不是时间上的。

以上道理，我觉得对于一个国家或民族也适用。我一直认为日本是非常矛盾的民族。这里所说的矛盾，与鲁思·本尼迪克特在《菊与刀》中所表述的那种矛盾的民族性格不完全相同。大和民族在处理矛盾的事物上仿佛具有独特的技巧。如面对本国文化和外来的民族文化矛盾，古有书中所写日本文化与中国文化的矛盾，今有书中未写的日本文化与欧美发达国家文化的矛盾。再如传统文化与现代文化的矛盾，现代的日本社会，既有传统艺术文化的百舸争流，又有现代亚文化的繁花似锦。此中实例，前者可举艺术家天野喜孝的设计作品将穆夏等欧洲艺术风格和浮世绘艺术风格融合为据，后者可以众多尺八大师与重金属音乐合作创造新的艺术流派为例。这种处理对立统一关系的技巧十分值得中国文化人思

考和借鉴。这种高深的技巧，大致来源于树立对待不同文化的正确态度。

不如就从中国文化与日本文化的关系来分析吧。在所有叙写日本文化史有关的书籍中几乎都会被提到，《日本文化史》这本书中也详细地陈列了日本文化中的中国元素。在新渡户稻造的《武士道》中也分析了儒家思想对武士道的影响。木宫泰彦的《日中文化交流史》更是介绍了中日文化交流的详细流变。但如何正确处理中日文化的关系，是个很复杂的问题。尤其是在现代，许多人或许盲目地吹捧日本的众多亚文化，又有些人则抱着“日本文化许多都是从中国学去的”此类观点自行取暖。

我对这件事情的看法，不如就用我对中日“茶道”的看法来向你简单解说。日本茶道，如冈仓天心的《茶书》中所述，它要求洁净，要求茶道面前人人平等，要求摒弃奢华的侘寂，要求一期一会。有人认为中国茶文化的不足之处就在于没有类似《茶书》一样提炼茶道精神的著作。但我反而觉得，这正是中国茶道之所在。中国文化往往讲究“不可说”，要求感觉，非文字能够表达。中国茶讲究在茶中喝出不同的人在不同时刻的心境，讲究每一次所喝的茶都是不同的。不同之人所泡之茶不同，时过境迁茶味也随之变化，这不正是只有喝茶的人才能悟出其中甜涩吗？如此，中日茶道是有相似之处的，它们都要求珍惜每一次独特的品茶经历。但他们又有不同，日本茶道严肃而拘谨，中国茶浪漫而奔放。

我总听到有人哀叹，日本有茶道而中国无茶道。我却觉得，中国绝非无茶道，而是它并不与“日本茶道”相符。茶道本身是个日本茶人创造的词汇，以中国茶的精神附会日本茶道的精神，必然南辕北辙。

日本人处理文化上对立统一关系的技巧大概就是：抱着对本民族文化信任的心态，去了解其他民族的文化。比起学习日本先进的漫画、设计等具体的文化，树立正确的文化心态或许对现当代的中国人更为紧迫。

林林总总，赘述至此，多谢你听我叙述了这么多凌乱而稚拙的观点。由于我的日语远达不到能够叙写出这些观点的水平，只能暂且用中文将它们表达出来，格式也只能采取中文的信件格式。我衷心希望等待着将它们翻译成日语拿给你看的那一天。不知你是否还记得我们在横滨约好一起前往四川品尝你喜欢的火锅？若有一日你来到中国，请务必让我陪你游览这里的大好河山。

顺颂秋祺

你的中国朋友 リン

2019年9月19日



## 本分难守

南方医科大学  
临床医学五年制二年级  
王茂源

前段时间，天皇逊位的消息引起了不少风波。终于，上周天皇的继承顺利地进行了下来。在外人眼里，天皇几乎为一虚职，为何能引来那么多关注？读过《菊与刀》，或许能对这个问题的解答有所帮助。

二战结束后，日本战犯大多受到了军事制裁，然而作为明面上的最高指挥者一天皇，并不在此列。这种安排大多是基于美国人的政治权衡。在这场权衡的背后，我们应该要关注到一些事实。《菊与刀》记录到，在对战犯的审问中，几乎没有人认为，天皇需对战争负直接责任；语气重一点的人也只是说“天皇是被蒙蔽了的”。日军对天皇的维护，令人称奇。不仅日军是这样，对于普通的日本群众，天皇的形象也一样。这种现象与日本“各守本分”的处世方式有关。

《菊与刀》中，作者对日本人的处世方式概括为“各守本分”，确如其词。这种特质其他国家也有，但少有像日本那么极端的：即使是一间小小的寿司店，店主都想子子孙孙有人继承，做好寿司店主长子的本分；即使后辈仅比前辈晚来公司一个月，也要接受前辈的指点、对前辈恭敬，做好后辈的本分；即使公司经营出了问题、工资在不断下调，员工也不愿意离职出走，要对企业保持忠诚，做好员工的本分……这些是我在其他一些日本作品里发现的一些情节，如果概括为“各守本分”，再合适不过了。里面有些行为我们可以理解，但有些却让人不好理解：员工进入公司是为了谋取生活所需的物质，既然公司的工资都无法保证我的生存，那我为什么还要为它卖命？这种不可理喻来源于文化的差异。日本有自己独特的文化，文化的印记能深烙于人的心中。天皇能在日本人心中占据极其重要的地位，也是如此。在不谈及天皇其他为塑造良好形象的行为下，天皇，就是日本文化的一种象征。

也是来源于文化的差异性，《菊与刀》中，作者把这些“各守本分”的行为当做等级制的产物——对于以“自由、民主”为主要内容的西方文化，这种带有束缚性的特征属于等级制的内容。然而在东亚文化圈中，理解成“旧礼教”可能更合适一点。日本文化受中国影响极大，在数百年间没有明显的断层，也没有像中国文化一样，经历过1919、1949年的大改造。封建时代，文化的作用主要偏向于维护统治者的统治，日本文化也如此。“天皇”这一位置的存在，其实可以大致反映出，日本文化中，关于天皇的内容得到了极大的保留。在不同的文化内，都或多或少存在着“君要臣死，臣不得不死”的忠义观，日本也有，我把它归于“旧礼教”上。也是这一种文化基础的支撑，才有了战犯统一“天皇无罪”的口供。

在中国封建文化中，有一句话叫“祖宗之法不可变”。这句话的内容与“各守本分”有本质上的相同点。《菊与刀》中描述的日本也有许多相似的“固执”的例子。天皇提前退位，实际可认为是对祖制的违背，那是否可以说天皇没有守好本分？在新闻发酵的过程中，大家讨论的有实际的天皇的年龄问题，有真假不明的阴谋论、矛盾论，我认为，文化问题应该也是一个

关注点。

每个民族都有自己的文化自信。天皇作为日本文化的象征，在行为上已经做出不合“本分”的举动，结合日本文化逐渐受全球化的影响，确使日本人产生对文化前景的担忧。那日本文化会衰败吗？

《菊与刀》中，作者认为，“等级制”构成了日本国内基本的人与人、人与国家的关系。若是人与人、人与国家的关系遭到了严重的破坏，日本文化才会完全衰败。不过在我看来，这很难。

在接受 100 多年的西化后，日本文化仍呈现其独特性：《菊与刀》所介绍的忠义观始终带有明治维新前的影子；书中描绘的人与人间有距离感的交往关系与如今所知的日本人的交往关系相差无几。文化交融对日本文化内核的影响有限。而人与国家的关系中最基本的一条，可以表述为：国民推动国家发展，国家保障国民生活。自二战结束以来，日本已经遭受数次经济危机，每次都会对人与国家的关系造成一定冲击。不过日本表现出良好的抗打击能力。

虽然看似形势不差，但日本社会已出现不少暗涌，例如社会老龄化问题、宅现象……所谓“经济基础决定上层建筑”，老龄化问题有很大概率改变日本的经济结构，从而改变社会构造、大幅改变日本文化。“宅文化”的流行，很多人直接电锅给动漫行业，但我认为，是否也要对“旧礼教”进行反省：美国的动画发展较好，为何没有“宅文化”流行？什么样的外部原因促使日本青年甚至成年人情愿“宅”？“谈资论辈”的传统对年轻人的带来了多大的阻碍……有部分人已经失去了文化的“本分”。

《菊与刀》介绍了太平洋上的一些岛屿，例如汤加和萨摩亚，在过去分有神圣首领和世俗首领。世俗首领是管事的，神圣首领是被供着的。然而外界强有力的文化一进入，当地制度、文化便发生了重构。本分难守，即使抗打击能力极强的日本也一样。日本只要还处于开放状态，世界其他文化对日本文化的作用便不会停止。

## 美到极致的哀伤

東北師範大学

汉语言文学（非师）一年生

鮑芝瑾

“在看花吗？”

“是。”

“为什么不去花园呢？万紫千红，百花齐放。”

“因为一朵花比一百朵花更美丽。”

一位清瘦的老人，眼睛亮如初夏的星辰，若有若无地弯着嘴角。那是来自上个世纪的一张照片，而我总是会被这样的一张照片打动。川端康成，是我所了解到的最温柔的孤独与悲愁。

他的作品，每一个文字都是一只蝴蝶，扇动着绝美的翅膀，把悲伤刻在人的心上。

《北国》的雪，是驹子，是叶子，是“往昔徒然空消逝”的终极的空虚；洁白的《千只鹤》，是雪子，是文子，是飘渺没有尽头的纠缠不清的爱；《古都》的枫叶，是“泪眼描将尽，愁肠写未出”的千重子的哀怨，是飘着细雪的清晨里苗子转身离开的背影，是川端康成成为日本传统文化发出的最后的呻吟……川端康成，把日本的物哀写到极致，他用世界上最细腻的笔触，将病态的心理描写的那样让人心动，让人心碎。阅读他的文字，不是走进一个故事，而是走进一个人的心里，你不知不觉中就屏住了呼吸，听他说，然后情不自禁地泪流满面。听着每本书里的每一个人讲着他的故事，讲着他的那一份担心，苦恼与无可奈何，好像一瞬间又看不到希望，一股孤独、一丝徒劳变成你心底绕梁三日的余音。你无法责怪故事中的人物，尽管在现实世界中你绝不会原谅一个出轨的男人，不会理解一个为爱失去自尊自爱的女人，无法喜欢上一个对自己一无所知的人……但在他的书中，你渐渐学会去理解，你开始心痛于他们所有的“不正常”，你开始明白原来这些病态其实只是童年悲伤和生活无奈的产物，每个人都是受害者，没有人可以当漏网之鱼。然后一遍又一遍地阅读之后你发现我们所有人都是这样，在爱情和生活中，无论相爱与否，勇敢与否，最初的热情总会有一些看不明的犹豫中渐渐变成失望，然后退缩，最后放弃。这是川端康成文字中的哀伤，美得让人窒息，让人痛得甘之如饴。

所以这样悲伤的天才在最后选择了结自己的生命，他一言不发，与这个世界告别。

“自杀而无遗书，是最好不过的了。无言的死，就是无限的活。”他在四十多岁的时候这样说，在七十多岁的时候这样做。而现在的我只要读到他的作品，总会想起一双深邃的眸子，安静地看着一朵花在黑夜里沉默地开放着。然后他会问我这样的一朵花美不美，用一种没有声音的方式。

可能这就是日本传统文学最经典的代表吧，《花未眠》里他写“凌晨三四点，发现海棠花未眠”。那么细致，那么温柔，但又那么悲伤。如果一个人，不是孤独到了极致，又怎么会在凌晨三四点一人清醒，又怎么会为一朵海棠的未眠而感动？读川端康成，我看到了日本在经济高速发展的外表下深重的悲伤，这种悲伤是不可抗拒的，而这样的悲哀来源于他们在现实社会中日渐迷失，日复一日的工作，肩负着一个家庭乃至一个家族的重担。日本人在忙碌中忘记了自己的归宿，而川端康成这样的人努力地呼喊，希望人们能够回头看看被遗忘已久的日本传统文化，希望二战之后人们可以在向西方学习的同时也不要忘记自己所生长的土壤。然而川端的文字虽然细腻，却并未像《源氏物语》那样通过大量和歌的插叙诗化景致、升华意境，更不同于三岛由纪夫通过对人物思想不断的强调和表达来提炼情感，而是大程度的依靠对景和物的描写来寄托升华小说的主题和人物的心情。川端康成的小说虽然也极力写日本的“物哀”，但又与太宰治的文学作品有本质的区别。他的故事有一种西方文学所无法传达的细腻之感，总是能通过一个个静处的细节掀起意识与感情

的狂澜。不过阅读完毕，哀伤和隐匿的波澜慢慢解构以后，一种留有浓厚佛教和现代西哲的印记往往也会显现出来。我想这就是川端康成文学的不同之处，他总是在一开始就给你希望，整个作品都透出纯真，自然的美，但每一分这样的美都伴随着一分无奈，一分失望，最终一切都变得徒然，变成主人公抱着遗憾的无可奈何。

我通过阅读川端康成来体会写字楼，繁华都市之外的日本，跟着他的文字，走进日本的乡村，走进日本的山区，看日本的雪和枫叶，与一个又一个孤独的人谈心。我从他的文学里看到一个充满失望却仍富有生气的日本：虽然生活很苦很累，虽然人生不如意十之八九，但生活中始终有美好的存在，也许是一朵悄然盛放的花，也许是一个少女的回眸一笑，也许是一只洁白的千只鹤……我开始用一种包容的眼光去看待一个社会，一个民族的寂寞，试着把这份寂寞看做一种文化，渐渐去了解日本的死亡文学。我在许多次阅读后终于理解了为什么川端康成会在最后选择了结自己的生命，就像村上春树写的那样“死不是生的对立面，而作为生的一部分永存”。在日本文化中，有一种直面死亡的禅意，要么是极致的繁花似锦，要么是永恒的寂静无言。大和民族的美学传统就是追逐极致，两个极端，非此即彼。而不论是物哀还是死亡美学，就如同奥修说的那样，是一种武士道精神在文学上的表现。这种得道，就是当一个人时时刻刻准备好了死去，那么他就彻底拥抱了活着的每一秒。

“花未眠吗？”

“是。”

“那你呢？”

“我是那个不眠的人。”

## 一枕纸书

聊城大学  
日语专业三年生  
王咏雪

### 随便翻翻，可消永夜。一来自《枕草子》的“小确幸”

初读《枕草子》总使我想起张岱在《自为墓志铭》中所写的“少为纨绔子弟，极爱繁华，好精舍，好美婢，好娈童，好鲜衣，好美食，好骏马，好华灯，好烟火，好梨园，好鼓吹，好古董，好花鸟，兼以茶淫橘虐，书蠹诗魔，劳碌半生，皆成梦幻。”这虽是墓志铭，虽然看起来又有些玩世不恭，但他的生活情趣和他对生活的享受，不禁让我赞叹。不同时代，不同背景，在《枕草子》中，我却是一眼看到了四时景色、弦乐对诗、山川湖海林，作者对生活的小得意、

小感动、小牢骚、小抱怨。清少纳言仿佛是一个懂得生活各方面享乐的杂学家，又或者是一位生活美学家，虽然有时又觉得她写的尽是琐事，但偶尔想想，又便觉得她是兴之所至，漫然书之。

在村上春树的随笔《兰格汉斯岛的午后》中提到过一个词“小确幸”，意指生活中“微小但确切的幸福与满足”。尽管《枕草子》是一篇随笔文学，但在清少纳言的所见、所感、所想中，《枕草子》又是这样一种“小确幸”：能赏一年四季最好的景色、游玩最妙的山、去逛最好的市集、去看最好的海以及妙解唐诗、散步闲聊、说悄悄话、徘徊期待却迟迟不来而如期而至的定子的挂念，一封久盼迟来的信，一场收麦盛景……《枕草子》的书评中，有一句写的特别好“随意翻翻，可消永夜”，平安时代的小日记，平安朝的宫廷小生活，只是览书便能活灵活现的想象在眼前，让我穿越时空看到别样的日本，以及在那个时代的喜怒哀乐，让我沉醉于它所描绘的日本古代宫廷贵族画卷之中。

### 兰省花时锦帐，草庵谁相寻？—去往《枕草子》所描绘的平安朝

五月时节，漫步山里；七月夜晚，拂晓赏残月；九月时分，破晓观露赏花。在平安这个处处和歌，读经的时代，让我念起那个一衣带水的唐朝。

唐朝，从贞观之治再到开元盛世，无论是宗教书法还是诗词歌赋都到达了那个时代的尖峰。在那时，中日友好交往和经济文化交流也一并出现了空前的盛况。从630年日本派出第一批“遣唐使”赴中国，再到后来的“鉴真东渡”，中间有不少日本留学生、学问僧，长期在中国学习和研究各种专门知识。而正是通过这些交流，日本在平安时期经济文化、宗教风俗等方面都流露出唐朝的影子。

日本民族是世界上公认的善于模仿的民族，而据说那时“遣唐使”回国后，同时代的平安朝参照唐制、仿照长安城建造奈良都城，唐风特甚，成为一股热潮。在《枕草子》中，也是处处能见“大唐的织锦”、“锦缎制的唐衣”、“唐朝屏风”、“唐朝样式的新柜子”、“唐朝的舞蹈”、“大唐君主的故事”……

中国进入唐朝以后，唐诗盛行一时，而同期处于平安朝的日本在文学创作上也深受唐诗的影响。“白楽天の詩に「香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」とあるからだつた。”在文中“香炉峰的雪”的一段里，描述了这样一件事情：在下雪的一天，宫女们早早拉下帘子，围着火炉在一起闲谈，皇后这时问道：“少纳言啊，香炉峰的雪怎么样了？”清少纳言立刻心领神会，把帘子高高地卷了起来。虽说故事简单，却是把白居易的诗《香炉峰下新卜山居草堂初成偶题东壁五首》之四的：“日高睡足犹慵起，小阁重衾不怕寒。遗爱寺钟献枕听，香炉峰雪拨帘看。”运用到了生活中去了。而在《枕草子》的“草庵”这一段中，又有另外一个小故事，藤原齐信寄来的信上让清少纳言写出“兰省花时锦帐下”的下一句，少纳言则回道“草庵谁相寻？”白居易有一首诗《庐山草堂夜雨独宿寄牛二李七庾三十二员外》：“丹霄携手三君子，白发垂头一病翁。兰省花时锦帐下，庐山夜雨草庵中。”而少纳言恰巧把后两句改写成了诗歌，却把她独自一人在草庵的孤独意境表达了出来。还有“开花的树”这一段里，在描写梨花时，又引用了“梨花一枝春带雨”来形容梨花的美……

清少纳言把《枕草子》和当时作为社会主流的汉文学完美相结合，又把唐诗运用的极其巧

妙，这不仅显示出了清少纳言的学识，而且展现出来了平安朝贵族教育对汉文学的重视，和唐文化在当时的盛行。

### 一衣带水，一苇可航。——在《枕草子》中重新认识中日文学交流

宫廷贵族处处和歌，擅长作诗的人又极受尊重，这些都要追溯于《万叶集》的编写。深受汉诗的影响，据说编写《万叶集》时，盛行汉学和汉诗文，许多万叶歌人都兼做汉诗。而最初，《万叶集》的目的只是作为教养书，供皇子、皇女阅读。一个世纪后，才发展到只有宫廷贵族才能受到良好教育，那么平安宫中处处和歌便可想而知了。

中国文化对日本有影响，日本文化中也有有别于中国文化的独特地方，或许，日本和中国，正是因为“一衣带水”，隔海相望，舟船往来，互通有无，才留下了如此深切的文化血脉。日本文化虽然可以说起源于中国，但是在《枕草子》中，我却发现，日本早已将那巨大的中国文化消化，形成了洋溢着大和民族精神的日本文化。

文化在进步、思想在进步、文学思潮纷呈，多样化，个性化，也是在进步。所以为了擦出中日共同发展的火花，中日文化交流也理当更进一步。

阅读书目：

《枕草子》上海三联书店，2016年7月版，著者（日本）清少纳言，译者陈美锦

参考文献：

《日本文化探究》中国文史出版社，2014年1月版，作者吴松芝、刘梅君、董江洪

《白居易诗歌在日本古典文学中的体现》文学教育（上），2018年11月28日版，作者张

明铭

《日本史话》广西师范大学出版社，2006年8月版，作者汪公纪

《〈枕草子〉浅说》外国问题研究，1987年4月2日版，作者赵小柏

### 悲悯之花，只是无奈飘零——读《无缘社会》有感

東北師範大学

財政学四年生

李岱霖

无缘社会，“无缘”是没有关联、各不相干的意思。

个人、家庭、社会，本应是微观宏观交错衍生，层层依叠且赖以维持。然而，人与人的疏远、家庭内部的分裂、人与社会的脱节，甚至无缘地终了死去，已经成为日本社会寻常之事。

读罢《无缘社会》，心中景象，如狂风过后，落红一地。悲悯之花，只是无奈飘零。

## 一、时代进程的狂风

我想归根到底，应从那些风说起。

日本的社会经济进程，起落似海岸的潮汐，波荡之后，人心变迁。而每一次变迁，都是一阵风，一切都是风的因果。

战后的东亚并未归于平静，日本因其工业基础与地理优势，成为入朝美军的大后方。旧帝国臣民的狂妄信仰已经破碎，但这不妨碍其成为工业复兴的中流砥柱。

十年光阴，经济复兴之风，让日本重回轨道。此时的日本，个人、家庭、社会关系紧密，上一代人所秉持的家庭伦理的传统仍然是社会的主流氛围。

七十年代起，日本进入腾飞与泡沫时期。许多人至今仍怀念，资本的逐利灯红酒绿，欲望的膨胀纸醉金迷。工业化与外向经济的发展，让一个资本化集约化分工化的现代日本社会真正成型。广场协定后，资本市场直走高位，经济泡沫急剧扩张。

这阵风掠过，一代人已经开始变化。此时的日本，工作应酬、通宵达旦、奢侈消费成为社会主旋律，人与人的距离开始疏远，家庭内的隔阂也不断加深。少有工薪阶层去顾虑身体的健康、陪伴家人的时间，因为出卖这两样东西能换来的，是乘数效应下的金钱，无形等级制度中的地位，繁华地段的居室，奢侈的消费，以及资本主导下的异化的心。

泡沫自有破灭之时。九十年代，伴随昭和平成的时代更替，宏观经济开始崩塌。曾经的奢靡物质与虚妄资本一夜之间灰飞烟灭。

这阵风后，便是失去的十年、失去的二十年。时代进程依然持续，经济的困境不会令一个国家停下脚步。各种新生事物不断出现，千禧之年后日本又相继经历了国内右翼情绪重燃、次贷危机的冲击以及“十年九相”的政治轮回。

苍生，一个个普通人、一代代普通人。在经历过战争的创伤、复兴的希望、泡沫的奢靡、崩塌的萧条后，会是怎样？个体在时代环境的力量下，终究是沧海一粟，只觉无力。眼前，低欲望社会、少子老龄化、社会阶级固化、空前的城市化、终身雇佣制的没落、就业萧条等等因素让人们无限怀念“泡沫之美”的同时，也最终导致了无缘社会。落花并不想飘零，无奈风已掠过。

## 二、悲悯之花，无奈飘零

提到日本的精神审美，会想到什么？

物哀景致中的感触于物、性情流露；幽玄神隐中的超然意境、心神相通；侘寂境界中的万物无常、涅槃寂静……这一切都敏感细致，留有韵味，这一切让人感到美与善意，这里应是一个温暖细腻、珍视此生的此岸。

但如今，不用说像物哀幽玄等精神之美的追求，连丧葬之事中人与人最最基本的悲悯，都难以奢求。一年中数以万计的无缘死者们，或因年轻时拼命工作与暴躁情绪、或因金钱往来中的瓜葛、或因怀才不遇执念未达的不忿，辛辛苦苦度过余生，亲人疏远、爱人离去、子女反目，空空荡荡无人在意地，在某一个时刻，终了此生。离开时，速食面的热气还在升腾，离开

后，甚至没有一个悲悯的亲人或朋友，去安置他的骨灰。人心之中的悲悯之花，就如此飘落一地。一切皆是无奈：

萧条时期，根本找不到合适工作的失业汉，选择救济金，就等于放弃内心最深处的尊严，所以宁愿在寒风凛冽的街道上过夜，也不想让人知道自己如此不堪；

年近古稀的劳务派遣工人，奔命赶工，不忘给已故双亲添点香纸，钢筋森林中的廉价公寓里，自己突然离去后却无人收尸；

泡沫经济时无暇顾及身体和家庭的裁退社员，儿女排斥，妻子远去，有谁会接受这位依赖退休金的老人，以及他的后事；

摩肩接踵的都市，被事业挫折与人际窘境击垮的家里蹲，依靠着孱弱父亲的养老金度日，甚至隐瞒老人的死亡，只为继续领用救济的铜钿；

壮丽城市化进程中，无法和儿女融洽生活的老人，被迫回到人烟稀少的乡下，带着抑郁和孤独，等待着自己的最后时刻；

他们大都将无缘地死去。无人知晓，无人祭奠，连最后奢求的墓地，也只来于信仰功不唐捐的僧侣。当他们的灵魂归于彼岸，尘世间的时代洪流依旧奔涌不止，无缘、无关、亦无挂碍。

得不到悲悯的苍生，如此不堪。但谁又能抵挡时代的自然进程？风阵阵吹过，悲悯之花无奈地飘零一地。

### 三、结语

横看成岭侧成峰。读懂一个国家，难。

国家是多元多维因素组成的有机体，三言两语说清，谈何容易。这篇文章，仅能说是单一角度的“知”，不敢妄称“懂”。

社会现象如国家的倒影。将视角转回国内，不难发现，无缘社会的某些表征也渐渐显露。同属东亚文化圈，同样经历过经济腾飞与放缓着陆的中国与日本，倒影似乎也会有重合之处。而对于特殊国情下改革深水期的中国，“无缘社会”现象也更具有深刻的研究意义。

最终，时代进程的产物也只有时间去评判是非。望着无奈飘零的花瓣，慨叹感伤之余，不妨停下脚步瞭望，或许远处还有花开？

阅读图书：

《无缘社会》[日] NHK 特别节目录制组[著]. 高培明[译]. 上海译文出版社



## 我忏悔的

湖北汽车工业学院  
国际经济与贸易二年生  
艾新宇

六年前，我囿于选择，好坏之别，显于情理。但最后选择的事实成了那瓣心就像是一片荒漠，炙热的风在上方撒野无休，夹杂砾石与浮尘，没有寂静之地。那是一份独身的胆战心惊，难以释怀。时隔之久，如今这忏悔的开头却是真真切切地源于夏目漱石的《心》之所作，让人回忆起来不禁阵阵隐痛。先生的笔尖触动至我百年之遥的明治，文墨里的知识分子，向往爱情却顾及着友人，想护全友人又患失爱情，得到了爱情最终也愧别友人。如此日夜煎熬的文人心，如此层叠交织的爱与诚，在风雨摇坠的明治时期都显得额外灰暗与不堪。

书中具有故事性的三位可谓对我来说都有些许感慨，里面的“先生”让看着的我不断矛盾，不断冲突。起初，我看“先生”，他像是出世避尘的思想家，可言谈举止却是成谜。““九月见。”先生道。寒暄完毕，我迈步走向格子门外。房门与院门之间有一株郁郁葱葱的丹桂树，像要挡住我去路似的在夜幕下张开枝叶。”原本我总是欣赏这样的细节，“先生”言语不多却总给人留下小小感动，“九月见”，这三字一句是温柔等待也是如约期盼，守静的丹桂在“先生”的住处春秋几度，待到九月相见便是暗香疏影，这三个字多少让人值得欣喜，“先生”说出这三字来也许无意却满是诚心。“我”也能在黑夜里看到它，还能认出它来，枝叶关情，让“我”不舍。我被无声打动，只是认为“先生”是个美好的人，笔者也精于生活的描写，让我能细细揣摩。“我重获自由之际，正是八重樱散落殆尽的枝丫上，开始长出如雾般朦胧绿叶的初夏时节。”所谓平静的表面下在不断颠覆，我起初看到的美好都是可悲的，“先生”活得如他自己所说，郁郁寡欢，不具备主动介入社会的资格，无法信任自己，一旦发生什么事情就会变成坏人，在独立自我的时代品尝着孤独的滋味。正是这样一个物，这样一个暴露了利己主义又忏悔恶果的人物，牵引着我的情绪，仿佛自己的影子被融进，一时陷入了恐慌。

书中的“我”是不谙世事的明亮曙光又是悲剧故事的发生者。笔者给出这样一位时代人物用意至深，“我”从“先生”那里获取爱情的经验和为人的教训，不要自我封闭的伦理，而要乐观善意的入世。“我”也是故事高潮的见证者，“我”收到了“先生”的遗书，这一切都拨云散雾开来，“先生”身陷于时代的危害，做不了一世好人，利己者害人害己酿成悲剧，“我”无奈看清了现实而继续活下去。我也许有时也是书中的“我”，那是最好的时代，也是最坏的时代，悲剧都已过去，可如果不吸取教训，悲剧也会是自己的结局。我也处于新生的最好时代，我也正直求知，可稍有羁绊也让自己踌躇不前，像是一场黑暗的过去。

故事的可恶之处同是源于“先生”的旧友 K。他的所有行为如同“先生”所述可用“精进”一词而形容，他与“先生”的爱情之争无疑是故事的悲剧，如此精进的人也束缚于时代的旧道德。他悟“道”，却没有真正渗透“道路”，他的“道”是个人的，不合时宜，必然孤独。在我看来，K的人生与我相距甚远，我没有K那般为道而牺牲一切的精神，没有祭奠时代的勇气，我只是看着他们的苦闷故事而隐隐不安。

引人不安的正是书中人物身上的利己主义，而这种利己主义也正是与道义相冲突的。笔者夏目漱石在他的演讲中曾提到他所主张的“个人主义”，所谓“自己本位”是一种建立在“道义”之上的个人主义，没有一定程度的伦理修养为基础，就没有发展个性的必要也没有行使全权的价值。我想之所以这故事也会让我陷入忏悔，怕是当时的我利己多于了道义。演讲中也提到了“德育”，伪善只会让结果更加恶化，这样陷于利己与道义间矛盾的选择也正是充分暴露了人性。至此，看完先生的作品让我有勇气想起了六年前的事儿...

我与“先生”的时代不同，但忏悔的心理挥之不去。利己给对方带去的疼痛共情与我，而我面对这样的问题选择了逃避，“先生”最终忏悔远去，给我留下的却是训诫。我被这本书触动，是它的故事，是它的情结，我的确从一名日本作者的笔下仿佛看到了自己，在他的笔下赫然审视了自己，也许翻开它，我得到的就是忏悔的勇气。

夏目漱石《心》

# 「笹川杯本を味わい日本を知る 作文コンクール 2019」 (日本語版)

## 入賞作品

## 目 次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2019」（日本語版） 一等賞作品

廈門大学 日本語文学 二年生	黄凱琪.....	45
湖北文理学院 日本語学部 三年生	吳 嬋.....	47
中国人民大学 日本語学部 修士一年生	蒋超儀.....	48
華東師範大学 日本語学部 四年生	倪菁菁.....	50

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2019」（日本語版） 二等賞作品

北京第二外国語学院 日本語学院 修士二年生	白文娜.....	52
南京郵電大学 外国語学院 四年生	喬迪婧.....	54

# 「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2019」

(日本語版)

一等賞作品

走れ！信頼の彼方へ！

廈門大学

日本語文学 二年生

黄凱琪

「走れメロス」、初めてこれを読んだのは、高校三年生の時だった。

主人公のメロスは、やがて結婚する妹のために、遠い町に買い物に出た。町は異様な静けさで、みんな、死にそうな顔をしていた。すべてがこの国の王の仕業だと知り、怒ったメロスは王宮に向かい、王を殺そうとした。しかし、たった一人のメロスが軍隊に勝てるはずもなく、殺されることになってしまった。メロスの最後の望みは、妹の結婚式に出席することであった。三日を期限として、結婚式が終わったら、すぐに王宮に戻るとメロスは国王と約束した。そして、その三日間、メロスの友達の石工が、メロスの身代わりとして王宮に留まり、もし、メロスが約束通りに帰ってこなかったら、石工は殺されることになっていた。

妹の結婚式を終え、メロスは急いで王宮へ戻ろうとした。しかし寝坊をしたり、橋が折れていたり、山賊にあったり、とうとうメロスは体力が尽き、倒れてしまった。

「もう、無理だ。わたしは国王の言う通り、約束を守らない男だ。諦めよう。」

今にも意識を失いそうなメロスに、ふと、友達の待っている姿が浮かんできた。

「・・・ダメだ！まだ、私を信じてくれる友達がいる！ここで諦めるのはダメだ！走れメロス！走れ！走れ！」

危うく諦めてしまうところであったメロスだったが、なんとか石工の処刑前に王宮に戻ることができた。誰も信じることの出来なかった国王は、石工とメロスが、最後まで互いを信じあっていたことに感動し、心を入れ替えて、優しい国王になろうと決心した。

さて、この話で、わたしにとって、最も印象深かったところが、二つある。

一つは、最後まで必死に諦めず頑張ったメロスだ。彼はずっと戦っていた。天気との戦い、他人との戦い、そして自分との戦い。メロスが疲れて、もう走れなくなった箇所を読んだ時、私はまるで自分の姿を見たかのように、悔しくて悔しくて仕方がなかった。心の

中で「頑張れ！メロス！負けるな！」と叫び、メロスに再び走って欲しい、と願った。高校三年生の私は、自分を超えたい、力を出し尽くしたい、というメロスの気持ちが分かったから、メロスが自分に勝った時、私は、涙が出てきた。そして長いあいだ、メロスは、私を支え続けてくれている。

もう一つは、メロスと石工の間の切れない絆だ。「人を信じる」と、口で言うのは簡単だが、実際に信じることは難しい。特に今の私たちがいるこの社会では、お金のため、名声のため、利益のため、他人を騙したりすることが、知らず知らずのうちに、すでに生きるための手段の一つになってしまっている。だから初めてこの話を読み終えた後、私は感動してしかたがなかった。かりに石工が、メロスの戻って来ることを信じられなかったなら、メロスは妹の結婚式に出席できず、悔しさを抱えたまま死んでいただろう。一方、もしメロスが自分に勝てなかったら、石工も国王に「甘さ」を笑われて、結局、殺されていただろう。しかし、二人の相手への信頼が、国王、そしてこの国を救うことになった。

この話に力を与えられた私は、日本への関心が高まり、大学に入って日本語を専攻することになった。そして一年間、日本語を学び、この話への理解も、より一層深まった。

そう、人を信じること。ただ周りの人との人間関係だけでなく、交流の輪を広げ、中国と日本との間の信頼関係を固めることも、私たち日本語学科の学生の役割だ。

中国と日本の交流は、何千年も遡ることができる。中国が強くて豊かな国だったころ、日本は中国に憧れ、中国のいろいろなことを取り入れた。シルク、薬草、技術、儒学、文字、唐の町を真似して自分の国の町を建てることさえあった。だから、中国と日本が、特に文化面で似ていることは納得できる。しかし、時間が流れるにつれて、中国と日本との関係は次第に、悪くなってしまった。特に1895年から1972年までの長い間、中日関係は悪化する一方だった。

現在、新しい通信手段が生まれ、私たちはインターネットを通じて国境を越え、他国の人々との交流が、ますます便利になっている。そのおかげで日本のアニメやテレビドラマが中国に伝わり、日本人の中国に対する認識も深くなった。これはある程度、中日関係を良い方向に発展させた。

でも、これだけでは足りない。私たちは、時代の交差点に生まれて来た世代である。中国は急速に発展を遂げ、日本も「令和」の時代を迎えた。これからの両国は、互いにとって重要な仲間になると、私は思っている。けれど、進む道には必ず障害が出てくるだろう。相手への疑い、歴史への恨み……メロスのように、困難にあっても諦めず、その疑いや恨みを、できるだけ消して、現在の平和を守り、相手への信頼を固めることこそ、私たちの役割ではないだろうか。

そしてまたいつか、中日関係は必ず真の意味で、信頼の彼方に着けると、私は、信じている。

## 映画「泥棒の家族」の感想

湖北文理学院

呉 嬋

「泥棒の家族」は、血のつながっていない6人の無関係の人たちが、窃盗によって生計を維持し、共同の利益のために集まって家庭を一時的に作っていく様子を描いています、最後に自分たちの秘密を守るために離れました。これは監督が私たちのために描いてくれた感動的で深く理解できる物語です、特殊な物語のように見えますが、登場人物の一人一人に自分の経歴があり、絶えず展開するストーリーを加えて、日本社会の現実を表現した物語となっています。観客は偽りの物語を通じて、現実の生活を連想して、そこから感動と学びを得ることができます。「泥棒の家族」は、特殊な「家族」として、現在の日本の社会関係や家族構造に共通している問題を撮影しています、これは鏡のようなもので、現在の現実を映し出しています。人間の感情の本質は、利己的であり、利他的です。私たちは他人の感情に影響を与えると同時に、自分自身の努力と引き換えに他人からフィードバックを受け、無限の循環を形成することで、感情が継続していきます。「葉の神様ではありません」という映画があります。私は、「泥棒の家族」は、「葉の神様ではありません」に似ていると感じました。「泥棒の家族」が作り話であるのに対して、「葉の神様ではありません」は事実をもとにした物語です。二つの映画の共通点は特別な状況にある人達と一緒に生活するという点です。そして、この状況が現実の生活を連想させることで、両映画とも非常に人を感動させる映画となっています。しかし、人を感動させるのはこれらの映画の最終的な目的ではなくて、観客に深く考えてもらうことで社会の反省を引き起こすことが映画の初志だと感じます。

「泥棒の家族」というのは、食べ物を盗むだけではなく、魂に幸せを錯覚させる感情的な絆が多く描かれて、いわゆる「生を盗む」です。もし生を盗まなくても、盗もうとするだけで、私たちは皆、泥棒の家族の一員なのかもしれません。「泥棒の家族」という映画は、公開以降ずっと注目を集めていました。東京の平屋には、老母、父、母、兄、叔母、そしてどこかで拾ってきた女の子が住んでいました。6人は血が繋がっていないのに、とても暖かい家庭を作りました。

良い芸術品は眼鏡のようです。その眼鏡をかけると、世界は更に鮮明に見えて、雨が降った後の白い花と黒い枝のようです。この映画は、「平民」の理解を何度も導いてくれましたが、この映画で、シリアスな細部はインクが皮膚に染み込むように胸に染みわたります。それから、私は街の人たちを見て、泥棒の一家のように生を盗んでいます。彼らは最も豊かな時に浮遊すれば満足で、過去と未来を全然聞きません。

「泥棒の家族」という映画は常に落ち着いた雰囲気、6人の家族一人一人が善と悪の面を持っており、残酷ですが、最後、この6人はこの社会に最も適した方法で各自の結末を決めています。同時に、この映画はシリアスで、家族の生存を描くことで、日本社会の

生存も描いて、高齢化が進みや貧富の格差が広がりなどの問題につれて、社会の裏側には汚れが多く、人間関係がだんだん麻痺してきています。東京で生活している内に、この都市にはもう1つ別の社会があるように感じます。そして、その別の社会にいる人々は、太陽の光の下で清らかな空気を吸う機会が一度もありません。「間違っているのは私ではなく、世界です」という一言で解答することができるかもしれません。

## 知られざる改革開放における中日協力の歴史

中国人民大学

日本語学部 修士一年生

蒋超儀

昨年、中国は改革開放 40 周年を迎えた。改革開放政策のおかげで、中国がこの 40 年間、大きな発展を遂げたことは、多くの人が認めている。しかし、政策実施の舞台裏に、官民間わず数多くの日本人が改革開放を支えたことは、知る人が多くはない。私もつい最近、「中国“改革開放”を支えた日本人」という NHK のドキュメンタリーを見て初めて知ったのである。

今年 2 月に放送されたこのドキュメンタリーは、あまり知られていない、初期の改革開放事業に力を入れた日本人にスポットを当てている。その中には、日本政財界のトップもいれば、建設現場の日本人技術者もいた。例えば、新日本製鉄の稲山嘉寛会長と経団連の土光敏夫会長は、1978 年の鄧小平訪日等の中日交流をバックアップした。所得倍増計画作成の中心人物であった大来佐武郎氏は中国政府の顧問となり、今まで計画経済しか知らなかった中国の高級幹部向けに世界経済の「啓蒙」をした。建設機械メーカー小松製作所（現コマツ）の技術者 7 人は北京内燃機総廠（北京内燃機工場）に派遣され、現場で国有企業の改革を支援した。

私はこのドキュメンタリーを見て、このような中日協力の歴史の存在に深い感銘をうけた。一番印象に残ったのは、1981 年に起きたプラント輸入契約中止という事件だ。改革開放の最重要プロジェクトといわれる上海宝山製鉄所は 1978 年 12 月に着工し、その建設に新日本製鉄を始めとする千社を超える日本企業が参加した。ところが、資金不足等の原因で、中国側は一方的に契約中止を決めたのである。しかし、通告を受けた日本側は腹を立てて中国のことを放っておくことにしたのではなく、協力するから真正面から問題に対応しようと中国側に働きかけた。プロジェクト再開のため、大来佐武郎さんや土光敏夫さんは自ら北京を訪れた。実は私は、当時同行した酒井拓夫さんと同じ疑問を持った。「中国



側が説明に行くべきなのではないか」。だが、土光さんは、「中国が困っては、こちらが行かなければならない」と思っていたのだ。

なぜ数多くの日本人がこれほど熱心に中国の改革開放を支えたのか。その答えもドキュメンタリーの中にあった。まずは、土光さんのような戦争を経験した日本人として恩返ししたい、或いは償いたいという気持ちとは切り離せないと思う。それに、中国の安定と発展はアジアないし世界の安定と発展に繋がると考える日本人も少なくなっただろう。一方、中国側が改革開放を断行する決心も要因の一つなのではないか。中国政府は日本人との協力に対する一般中国人の心理的な抵抗感に打ち勝って、記者会見で発展の遅れを自認したり、極秘の経済資料を日本関係者に見せたりした。改革開放への協力を求める中国人の誠意はちゃんと届いただろう。

正直に言えば、ドキュメンタリーを見て私は驚いた。中日関係にこのようなハネムーン期があったとは知らなかったのだ。私にとって、中日関係というと、むしろ敏感、紆余曲折といったキーワードがまっすぐに思い浮かぶ。

改革開放を通して中国はGDP世界第二位の国に成長し、経済上日本と肩を並べるようになってきている。しかし、それにひきかえ、両国民間の距離は離れつつあるように見える。実際2018年に中国外文局と日本の言論NPOが共同実施した第14回中日共同世論調査の結果では、相手国に「良くない印象を持っている/どちらかといえば良くない印象を持っている」と答えた人は中国にも日本にも半分以上を占めたことが分かった。戦争が遠い昔の話となり、中国より欧米の文化に親しむ日本の若い世代には、土光さん世代の中国への恩返しや償いの思いは既に分かりにくいものであろう。また、高度成長の中育ってきた私たち中国の若者にとっても、中日関係の友好ムードより両国関係の不安定を反映する情報のほうが目につきやすい。このままでは、両国の若い世代間の距離もますます開く。しかし、中日関係の未来の担い手は、まさにこの私たちである。いろいろ考えながら、40年前に中国の発展と一緒に取り組み、そして今も交流を続ける両国の技術者たちの姿が現れた最後のシーンを、私は複雑な思いで見つめた。

「相手国に対する良くない印象の理由」の一つとして、「歴史問題」はよく挙げられる。歴史は忘れてはいけないものだ。戦争の歴史はもちろん、友好協力の歴史を知るのも大事であろう。40年前の改革開放事業における中日協力の歴史はこれからの両国関係発展に貴重な経験を提供している。

ドキュメンタリーの一言は今でも私の心に響いている。

「国と国との困難に直面しながらも、人々は互いを理解しようという努力を続けてきました。」

理解する意欲。歩み寄る努力。それこそが中日関係の未来を切り開く重要なカギだと信じる。

## ネットカフェ難民

華東師範大学  
日本語学部 四年生  
倪菁菁

言語を学ぶ一番いい方法は何だろうか。大学で専門の日本語をゼロから学び始めた時に一度考えたことがある。それは日本に行って生活することに違いない。自然と話したり聞いたりする機会が多くなるからだ。しかし、私はこれまで一度も日本に行ったことがない。

ある時、大学の聴解授業で先生が「72時間」という日本のドキュメンタリーを見せてくださった。それをきっかけに、私は日本のドキュメンタリーにはまった。部屋で気楽に日本語を勉強する方法である。内容もドラマや小説と違って虚構ではない。ドキュメンタリーには生き生きとした生の日本が映っている。私の価値観も変わるかもしれない。72時間のシリーズだけではなく、日本風土記などいろいろなものをネットで探しては見ていた。

ある日いつも通りドキュメンタリーを探していた時、再生回数が多い「ネットカフェ難民」と題するものを見つけた。「ネットカフェ」は知っているが「ネットカフェ難民」って何だろう。私は興味を感じ見始めた。

画面にネットカフェの看板が映る。「格安！長期利用コース」という一行を見て、「ネットカフェを長期利用する人がいるのか」と思った。カメラが中に入ると個室のドアがたくさん並んでる。ドアの横にはスリッパがある。私は「長期利用者」という表示を思い出し、中はどうなっているのか想像しながら見続けた。個室の中が映った時、私は驚いた。中は思ったよりずっと狭くて暗い。あるのはパソコンが乗っている机と椅子だけだ。画面に若い男性の長期利用者が映る。「一番最初の夜には、やはり体が休まらなかったですね。」と答えている。

それを見て、ネットカフェへの印象が一変した。私にとってネットカフェのイメージはゲームしたり映画を見たりする場所だった。一泊ならまだ我慢できるが、一畳程の息苦しい環境に一人で何日も泊まるのはどうしても想像しがたいのだ。

男性は建築現場の非正規雇用の警備員で給料が少ない。部屋を借りるお金がないからここに泊まると答えている。もう一人の中年の男性は前の仕事が家に帰る時間もないくらい残業が多かった。上司からのパワハラにも耐えられず、仕事をやめて四か月もここに泊まっているという。

私はなんだか気持ちが重苦しくならずにはいられなかった。生活がうまくいかない彼らへの同情の気持ちがないわけではないが、非正規雇用だから給料が少ないとか、残業でストレスがたまるとか、愚痴ばかりを言って全てを社会のせいにする彼らを見て、なんだかやるせなかった。彼らにとって、今一番大事なのはこの息苦しい場所を早く離れて、よりよいところに住むことなのではないか。でも残念なことに、このドキュメンタリーでは現

状を改善しようという意欲が伝わってこなかったのだ。

私は、この問題に興味を持ち、日本人の教師にネットカフェに関するドキュメンタリー「クローズアップ現代ネットカフェ難民」という番組を紹介していただいた。そして、彼らがネットカフェ難民になった理由を知った。

ある若い男性の話だ。就職氷河期の中、正社員の仕事が見つからずに否応なく派遣社員になったという。しかし、仕事は途切れがちで、月収は多い時でも15万円ほどだ。アパートを借りる資金が貯まるまで、ネットカフェに泊まることにした。しかしいくら一生懸命に頑張っても仕事は途切れがちでお金は貯まらない。4年経っても彼は依然として部屋を借りられずにネットカフェで過ごしているという。

ネットカフェ難民には現状を改善しようという気持ちがないというわけではなかった。生きていくためにギリギリなお金と不安定な毎日で、新しいアパートを借りるのも難しく、家族や友達にも頼れないとしたら、無気力になってしまう人がいても不思議ではない。その瞬間、彼らの気持ちが分かるような気がして、さっきまでのネットカフェ難民のネガティブな生活態度に対する歯がゆい気持ちが消えていった。

その代わりに、画面に映った自分の歳と同じぐらいの男性が辛い生活と必死に戦っているのを見て、世間知らずの自分は本当に情けないと思った。これまで私は誰しも20代は人生の中で一番輝かしい、未来への期待にあふれた時期だと、そう思い込んでいた。大学にいる私はいつも自分が見ている世界が社会のすべでだと錯覚していたのだ。

しかし、ドキュメンタリーを通して今まで知らなかった社会の側面を知り、これまでの考えが変わった。それは「幸い」なことだったと思う。私は当たり前だと思った今の生活をもっと大切にしたいくなった。

「Net Cafe Refugees」

世界報道写真財団主催報道コンテスト日本のマルチメディア部門3位入賞

「ネットカフェ難民」NHK クローズアップ現代

# 「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2019」

(日本語版)

二等賞作品

日本古典の力

北京第二外国語学院

白文娜

今年、先生のおかげで、『万葉集』、『竹取物語』、『枕草子』、『奥の細道』など古典文学の名作の原文を読み始めた。私から遠く離れた日本古代の文学世界に入り、想像力に満ちた偉大な時代に出会った。原文を読めば読むほど、古典の不思議な力を感じた。例えば、気に入った『枕草子』に触れ、鮮烈な印象を受けると、その感動は色褪せることなく余韻を残した。

前に、『枕草子』についての認識は清少納言の才能に集中していた。今回、原文をじっくりと味わった時、中宮定子のことに注目し始めた。そこで、私に深い印象を残した『枕草子』の二七八段「雪のいと高う降りたるを」について考えてみたい。この章段は「香炉峰の雪」として知られている。このエピソードが生まれた背景は雪が非常に高く降り積もっていたが、いつもと違って、格子を下ろし、炭びつに火をつけ、皆でおしゃべりをしていた時である。この時、定子が「少納言よ、香炉峰の雪はどんな様子かしら」と尋ねた。清少納言は定子さまの気持ちを察して、白居易の漢詩「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看」をしぐさで示したのであって、素晴らしい対応で返した。

これは清少納言が機知に富む女房であることを表現したエピソードとして名高いが、角度を変えて考えれば、この場面を見て、即座に「香炉峰の雪はどんな様子かしら」と聞いた定子さまは漢文学の教養が清少納言に決して劣らないと言える。学者の家に生まれ、幼いころから英才教育を受け、優れた和歌の才能と豊かな漢詩文の知識を持っている清少納言のことが大いに気に入っている定子さまは如何なる人物なのか、興味を持ちながら、『枕草子』を読んだだけでなく、作品の登場人物も調べてみた。例えば、定子の父親の道隆は「猿楽言」を好み、酒を嗜むし、おおらかで明るい風雅人であること、定子の母は円融朝に掌侍を務め、高内侍と称された人で、女ながらに漢文を能くする才媛でもあること、いろいろなことを知るようになった。さらには、その時代の歴史や文化にも興味を感

じた。だから、古典を読むことは日本の古代文学を学ぶだけではなく、日本の歴史や文化を知るのにも役に立つだろう。

この作品を読み終わった後で、定子と清少納言の相互信頼の仲に感動させられた。とりわけ二七八段の「雪のいと高う降りたるを」である。なぜかというと、定子が、「香炉峰の雪はどんな様子かしら」と聞く前に、わざわざ「少納言よ」と注意して清少納言を指名して答えさせた。その時、定子は必ず清少納言がこちらの気持ちを察して、自分を満足させるような答えをしてくれることを信じているからこそ、問題を出したのだった。最後に、中宮はその打てば響くというように会心の微笑みを漏らした。問う中宮と答える納言と、両者の呼吸はぴたりと一致した感がある。ここから互いに信頼しあう二人の関係に感動せずにはいられない。

ここまで読んでくると、思い出したことがある。ある日、友人と一緒に寮に帰った途中で、「長生不死」ということが話題になった。私は思わず「この世界で長生不死の薬があるもんか」と言った。友人はすぐさま「きっと富士山の山頂にあるだろう」と答えてくれた。その時、彼女が疑いもなくそう答えてくれることを信じていたかもしれない。『竹取物語』を勉強した時、友人はその冗談を言ったことがあるからである。案の定、彼女は思わず「きっと富士山の山頂にある」と口をついて出た。私たちは顔を見合わせて笑った。その時、ほんとに「あなたに会えて本当によかった」と言いたかった。千年前、定子と納言はお互いに会えることが嬉しく思われてならないのではないだろうか。その時、私と友人の暗黙の理解が定子と納言のこの場合と見事に重なっているのではなかろうと。

清少納言は『枕草子』を書いた時、これが日本の古典として後世に残ろうという野心は全くなかったかもしれない。しかし、この作品は人々に与えた感動は時代がどんなに激変しよう、社会体制がどう変わろうとも、幾世代を通じて変わることなく続いてきているのである。あるいは、古典は時間によって、聖化されるのではなく、むしろ時間を超えて改めて読み直し、現代人との対話である。この対話は有効に行われるならば、いろいろな意味で我々の精神を豊かにするのに役立つに違いあるまい。これこそ日本古典文学が私に与えた影響だと思う。また、日本の読者が感動したように、中国の読者も感動するだろう。従って、日本古典は日本のものであると共に世界のものでもある。日本の古典文学は、「雪のいと高う降りたるを」のような千年の歳月が経っても色褪せることのない感動は日本古典の力であると思う。

## 素晴らしい退歩

南京郵電大学

喬迪婧

近頃読んだ本は原研哉の『デザインのデザイン』である。この本の著者は有名なデザイナー、無印良品の芸術総監原研哉先生である。「無印良品」は日本で有名な雑貨ブランドである。この本で説明されている「無印良品」のデザイン理念によって日本人の「退歩」に関する哲学が分かる。

「無印良品」のスタイルと設計理念とは質素、飾らないこと、モノの本質を還元すること、また自然と快適、そして地球にやさしいことである。その中に映された日本人の生活態度は、素朴なものを好むこと、簡潔だが品質のよい生活を求めること、環境に優しい生活態度である。これに基づき、素材の運用が十分であるか。物品の大きさ、重さ、包装が適切であるか、生産や輸送に不必要な無駄がないか、モノの生産、輸送から廃棄、回収までを再考し、自省する。このことから、日本人はよく自分の言行を反省する民族だと思う。

高度に発達した社会の中では「過度進歩、過度繁栄」の意味を常に省み続けている。だからこそ、日本人はそんな洗練された、シンプルなデザインをすることができるのだろうか。このような簡単な中に、人間性に対してもっと多くの配慮がある。デザインでは、日本人は誰よりも「空」の中身を理解している。「空」とは、不必要な外的刺激を排除して、人の魂をこの空間に入れて自分を感じる器である。中国の寺院の華麗さとは対照的に、日本の寺院は、ほとんどが素朴でシンプルである。多くの中国人は初めて日本の京都の銀閣寺で枯山水を見た時、とてもがっかりするという。中国人の観点から見れば、これはあまりにも粗末なものだからである。何度か見ると、「余白」の良さを感じるようになる。日本人デザイナーの作品はいつも禅のような静寂さをにじませている。彼らの自然への感得、生活への賛美は、いつも細かいところに小さな知恵を感じさせることができる。これは、日本の限られた土地、恵まれない資源や急速に増えた人口に関係しているかもしれない。日本人デザイナーは、日常的な生活の中で常に小さなアイデアを灯すことができるようになっているようである。また、彼らは「人」と「環境」をより重要な位置に置くことが多い。

原研哉の哲学とは、何だろうか？ 私は彼の哲学は、冒頭に述べた「退歩」の哲学であると思う。アメリカの商業消費社会のスローガンは「私はこれがほしい」、「これ」は個人の意思に対する断固とした宣言である。しかし、「これ」の表現の意味は自意識が強すぎて、個性というものがむやみに高く評価され、周囲と衝突しがちがある。原研哉は「これでいい」ということを提唱している。「これでいい」というのは、品質が要求されていないのではなく、個人の欲望を抑えることである。一步下がってより広い範囲を見渡す、より真の心の自由に近づくことである。「これでいい」は素晴らしい退歩であると思う。農

夫が田植えをするように、自分の頭を低くしているからこそ、水田に映っている空がよく見える。後戻りしているからこそ、田植えを続けていける。それは生活についての「退歩」の哲学である。「退歩」は必ずしも消極的な態度と失敗ではなく、積極的な進歩と収穫である。同じように、写真を撮るとき、広角レンズをより独特かつ効果的にするためには、一步下がってシーンがレンズに取り込まれるかどうかを見ることが必要である。時には、一步後退するのは局部だけで、そうすれば私たちはずっと後退してすべての草花と木を撮影することができる。このような「退歩」は、人々をより遠くから明瞭に見られる。

人類社会は常に競争の社会であり、このような社会の中で、私たちは生きるために多くの挑戦に直面しなければならない。この本からこのような物欲に溢れた社会では、私たちも純粋な心境を保つべきことを学んだ。

『デザインのデザイン』原研哉著